ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ

～(1) ドイツ戦後史の映像レファレンス～

吉　田　和比古

0．世界地図から消滅した国－DDR, Unser Vaterland－

1985年は、J・S・バッハ（Johann Sebastian Bach, 1685-1750）の生誕300年の年にあたっていた。この年の7月筆者は、ドイツ民主共和国（Deutsche Demokratische Republik: DDR）いわゆる「東ドイツ」の商業都市ライプチヒ（Leipzig）のカール・マルクス大学（Karl Marx Universität: KMU）において、世界中から集まってきたドイツ語学研究者研修会に参加するために、ソビエト連邦を経由して東ドイツに渡った。モスクワを経由して初めてライプチヒ郊外の空港に降り立った時に驚いたのは、飛行場のコンクリートの路面が雑草だらけだったことである。東独市民の旅行可能な社会主義国という外国から、とりわけモスクワ観光から戻る市民や家族連れにまざって、税関を通過したまでは良かったのであるが、到着は午後3時頃であったにもかかわらず、両替所は既に閉鎖していた。東独の通貨を一切持たないでどうやってライプチヒの市街までたどり着けばよいのか、一瞬途方に暮れた。だが発車寸前のバスの運転手を説得して何とか乗せてもらうことができた。説得というよりは、「私は日本の国家公務員であるから、あなたが乗車を拒否すると国際問題に発展しかねないぞ－」とかなり脅迫めいた懇願であった。大きな荷物を抱えた日本人とおぼしきアジア人がバスに揺られて突っ立っているのにもかかわらず、座席に座った市民はわざとその存在を無視するかのように、こちらに目を合わ

せることもなく、じっと車窓の外を眺めている。これが東独の人間のホスピタリティーかと少し呆れたものである。そして小一時間でようやくライプチヒ中央駅に到着、早速通貨交換所に向かう。そこから大学までは歩いて10分の道のりである。ドイツが東西に分断された国家であるという認識はあったが、少なくとも当時日本と東ドイツとは国交関係が樹立されていて、筆者は「ワイマール協会」という日本におけるゲルマニストのための文化的架け橋をたどって、東ドイツにわたったのである。当時の東ドイツの国是は「反ファシズム、ナチスドイツの全面否定」にあり、また社会主義国の優等生として自他ともに任じていた。しかしながら、町中を走る全て同じデザインの乗用車がまき散らす排気ガスは空気を薄い青に染めて、まるで1960年代の日本の風景を見る思いがした。

上記の段落の書き出しで用いたいくつかの用語はすでに地球上から消滅した歴史的概念となってしまった。すなわち「東ドイツ」という国家は消滅し、「カール・マルクス大学」という名称は消え、元のライプチヒ大学という呼称が復活した。ゲバントハウス・オーケストラとオペラハウスをはさむ「カール・マルクス広場」も「アウグスト広場」と旧名が復活。もちろん「ワイマール協会」も今は有名無実。ソビエト連邦は、国名を変更し、伝統的な「ロシア」に戻った。筆者が、今この原稿をしたためているワープロは「とうどく」と入力し漢字変換すると「東独」が現れるが、いつの日かそれも消滅することになるだろう。またいつの日か、J・スターリンという名前もロシアの歴代の皇帝（ツァーリ）の亜流として連なるかも知れない。ただバッハ（＝小川）の名前と彼の音楽芸術のみが、永遠の生命を保ちながら、大河のように悠久の時間を生きつづけていくようである。

1．本研究の目的

～ビデオ・アーカイブという資料保存作業について～

1980年代から一般的に普及を始めたVHSビデオという映像録画媒体は、個人レベルでの収集を含め膨大な量にのぼり、それは同時に20世紀という「戦争の世紀」の歴史的研究にとっては不可欠な一次的レファレンス資料になりつつある。ところが市販のビデオ映像資料はともかくとしても、テレビ番組に関して言えば、一度放送されてしまうと、見逃した場合その映像にたどりつくのが大変困難である。なぜならテレビ局は、過去の番組を個人的に貸し出すシステムを形成していないからである。またその必要もないと考えているのであろう。しかしながら、公共の図書館で自分の手元にない文献を検索することができるのと同様に、もし、見たいテレビ番組を過去にさかのぼって見ることができれば、それは製作者の意図がどのようなものであれ、情報価値としては無視できない貴重なものとなるはずである。たとえ番組そのものを見れなかったとしても、番組の製作意図やおよその概要を知るだけでもかなりの程度の参考情報となるであろう。すでに何人かの識者がマスコミを通じて訴えていることであるが、「テレビ番組図書館」のような公的施設があればその有効性は既存の図書館と同様に情報の集積センターとしての大きな機能を果たすことになるだろうと思われる。すなわち、映像ライブラリーの公共化である。

おそらく20世紀後半の文化において大きな意味を持つのは、映像情報の私有化ではないだろうか。従来は、映画館がその役割を担ってきた映像情報への市民のアクセスは急速に各家庭のテレビにとって代わり、そのテレビも次第に個人所有に移行しつつある中で、ビデオカメラとビデオテープの録画再生機の普及は、情報の私有化と並んで、情報への反復的なアクセスを可能にした。それはある意味では、長い間の人間の夢の一つの実現でもあったと言える。人間が映像の歴史を語

る時に必ずや一章がさかれるはずの20世紀のエポックの一つでもある。現代日本社会の活字離れの問題は別にするとしても、我々の日常生活における主としてテレビを通じた情報の影響は、大変に大きいものがある。もちろんテレビを見なければそれだけのことであるから、ことさら社会現象として大げさにする必要もないのであろうが、それでもなおテレビ・メディアの存在を度外視して現代社会の文化を語れないと規定することはほぼ妥当であろう。そこで、「ドイツ社会文化論」のビデオ・レファレンスとして次の番組を紹介し、VHSの普及に陰ながら努力を重ねてきた多くの日本の技術者にまず賛辞を送りたいと考える。

0.「窓際族が世界規格を生み出した～執念の逆転劇・VHSビデオの誕生～」〔2000年4月4日・NHK『プロジェクトX　挑戦者たち』・45分〕　日本人が初めて生み出した世界規格である「VHSビデオ」の誕生秘話を紹介する番組。VHS誕生という快挙は、当時、弱小といわれていた家電メーカーの窓際族技術者たちによる意地の成果でもあった。1970年の時点で業界8位であった大手電気機器メーカー・ビクターは当時脚光をあびつつあったビデオ事業に乗り出した。しかし結果は赤字続きのさんたんたるもの「1年やれば首がとぶ」ともいわれた事業部長を任せられたのは高野鎮男氏だった。高野氏は自分の夢を捨てず、わずか3人の技術者だけで極秘プロクジェクトを結成する。そこで本社には一切報告せずに「新型ビデオ」の開発を続けていった。6年の努力のすえ、ようやく完成させた「VHS」を、高野さんは国内外のメーカーに惜しげもなく公開した。自社の利益を度外視したこの戦略が、VHSを世界規格に押し上げていった。短期利益を重視する会社と闘い続け欧米を追い越す夢を実現させた「VHS開発プロジェクト」の執念を追いかける。

注〕VHS方式

当初から家庭用ビデオの基本的要件をもとに開発設計された。120

分と録画時間が長いうえ、小型計量でコンパクトにまとまっており、画面の美しさという点でもすぐれている。1976年、各電機会社が「VHS方式」に着目、その採用を決定した。そして「VHSビデオ」は今日では家庭用ビデオの世界規格となっている。なお家庭用ビデオの開発・商品化で他社を圧倒して先行していたSONYの「ベータ方式」は、その画質の良さとVHSより小型であるという利点があったにもかかわらず、数年間VHSと市場で競合しながらも、技術の非公開性のゆえにやがて敗退していったことは惜しまれることでもある。

しかしながら、先述のように1980年代に普及が本格化したVHSビデオテープ〔アナログ情報媒体〕は近い将来DVD（Digital Video Disc）というデジタル情報媒体にとって変わるだろうと予測されている。この技術変革のいちばんのメリットは収録された映像の「画質」の劣化がかなりの程度防ぐことが出来る点と、さらには収納スペースの経済性にあるという。もちろんそれ自体は大変よろこばしいことであるが、DVDの普及に伴い、やがて過去数十年世界中で録画された膨大な数量のVHSビデオテープは、再生装置（プレイヤー）が入手困難となれば、その瞬間から再生不可能なただのプラスチックのゴミの山を形成することもあり得る。テクノロジーの発達があまりにも早すぎることは、消費者の側から言えば、絶えず新種の電化製品を受動的に買わされ続けるという「市場経済における奴隷」の位置に甘んじることを強いる。そこで、本研究では、将来は、すべてのVHSテープの情報がDVDに変換保存されるだろうということを前提としながらも、筆者が過去15年間取り組んできたVHSビデオ・ライブラリーのレファレンス作りを主眼としながら、20世紀の工業的造形としての「VHSビデオテープ」へのオマージュを一度捧げてみたいと考える。すでに別の論考で、ジャンル別のビデオ・レファレンスを部分的に発表してきたが、今回は、日本のテレビ・メディアで放送された番組を中心として、テーマを「ドイツ社会文化論」と設定し、そのテーマに

沿ったプログラムを年代的に列挙し集大成してみることにした。もとより収集そのものは完璧とは言えず、筆者も見ていない数多くの番組が存在している（いた）はずであるが、本稿を発表の後に、筆者の主催するメディア論ゼミナールのホームページ上で公開し、さらに不特定多数の相手との情報交換をしながらレファレンス内容の充実を図っていきたいと考えている。すなわち本稿は大きな雪だるまを作るための最初の小さな核をつくることを主眼としている。20世紀が戦争の世紀と言われつつ、もう一方で「映像の世紀」と言われる時に、このレファレンスが後世の歴史研究者の関心を少なからず引きつけることをひそかに願っている。

2．ビデオ・アーカイブを読みとくための前提知識

いかなるテレビ番組も、それがドイツの社会文化にかかわるものを含め、それが放映された時の日本の時代状況や、番組製作の当該国の社会的文脈を考慮してみる必要があると考える。文学作品の分析が、言語芸術作品として作品それ自体を自立した芸術として論じる方法と、それが書かれた社会的文脈を考慮して読み解く方法がの二つがあるとすれば、筆者は後者の視点をとりたい。もちろん収集された多くのテレビ番組の中には、質的に高いレベルのものもあり、それはいつか「古典」と呼ばれるようなものも含まれているはずであるが、特定の番組ないし映像作品を、人が「古典」というレッテルを貼って評価するには、すべての古典がそうであるようにもう少し時間の経過が必要であろう。ともあれ、本章では、簡単にドイツ戦後史を概観し、そこに含まれるキーワードが、後半で紹介する番組とどのような結節点を持たせていくか－それは読者一人一人の関心のありように委ねたいと考えている。なお、テレビ・メディアが放送した番組のオリジナル・テープの圧縮放映やそれ以外に考えられる番組構成上の操作などの映像メ

ディア論的ないくつかの問題点を含めて「原典批判〔テクスト・クリティーク〕」の問題については、このアーカイブ・シリーズ〔5回の予定〕の執筆終了後に総括的に論ずることにする。

3．ドイツ戦後史のあらまし

ドイツ現代史ーとりわけ1960年代以降のドイツ現代史は「壁」の存在とともに有り続けたと言っても過言ではない。いったいその「ベルリンの壁」とは何であったのか、多少の予備知識が最低限必要であろう。『法政理論』の読者の大半が学生であることを考慮して、ここで少し概観しておくことにする。従来、歴史の学習は以下に述べるような形での言語情報の羅列、キーワードの記憶といった学習的側面が目立っていたわけであるが、それはドイツの歴史に興味や関心を持たない学習者にとっては、きわめて退屈な記憶作業である。あとで紹介される様々なビデオ番組は、そうした平板な歴史的事象の膨大な羅列という博物館的なカビ臭さを排除し、その歴史の現場に介在する目撃者であるかのような臨場感をもって3次元的な歴史の現場に流れる空気の追体験に大きく貢献するはずである。

1945年5月、ベルリンの陥落でナチス・ドイツが崩壊した。ドイツは国土の4分の1を失い、1000万人以上の難民を生み出した。ソビエト軍の砲撃や米・英の空襲によってベルリンは廃墟と化した。街全体に死臭が漂い、ある専門家は復興までに50年はかかると分析した。人々は手渡しで一つ一つ瓦礫を取り除いた。瓦礫を取り除き運んだ女性たちは“Trümerfrau”「瓦礫女」と呼ばれ、彼女たちの運んだ瓦礫はベルリン西部に小高い丘を作り上げ、そこはTeufelsberg（悪魔の山）と呼ばれた。市内に丘陵地の少ないベルリンにおいて、ここは冬になると子どもたちの恰好の遊び場となっている。1945年5月ー敗戦の年ーそれは『ドイツ零年』と呼ばれている。

「ドイツ零年」（‘Germania Anno Zero’ 1948年・イタリア映画）監督／原作／脚本：ロベルト・ロッセリーニ。「無防備都市」「戦火のかなたに」に続いてR・ロッセリーニが、ベルリン・ロケで撮影したネオ・リアリズモ（新・現実主義）を代表する一作。第2次大戦直後、焼け跡のベルリンの廃墟に生き延びた一家がいた。父は病に伏し、娘は連合軍兵士相手に体を売って家計を助ける。ナチ党員の生き残りの若い長男は毎日家でゴロゴロしている。末っ子のエドムント少年はヤミ屋の手先として働いていたが、ある日昔の小学校の教師に出会い、弱いものは死ぬべしという思想を吹き込まれ、病床の父に毒を盛る。映画はオール・ロケで、俳優は全員素人で作られ、作り物の感情を排除してあくまで冷徹な目で戦後の荒廃した人間性を見つめる視点は、後の映画作家の世代にも大きな影響を与えた作品である。〔B&W 74分〕

戦後のドイツは瓦礫の中から始まる。戦後のドイツは4つの戦勝国がそれぞれ分割・管理したが、首都ベルリンだけは、ソビエトの管理地域の中にすっぽり含まれていた。だがベルリンは一つという考えから4か国が共同統治することが決まった。当時の戦勝国によるドイツ全体とベルリン市の分割占領の状況は次の図を参照されたい。

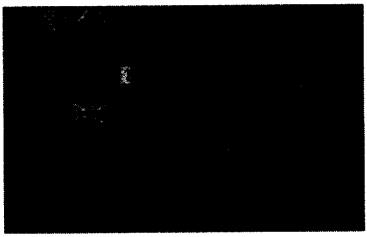

図1

ベルリン市のソ連統治地域が「東ベルリン」、仏・英・米の統治地域が「西ベルリン」

図2

ドイツの分割占領：ソ連占領地区が「東ドイツ」、英・仏・米の占領地区が「西ドイツ」となる。

占領政策で急務であったのは、ベルリン市民のための食料確保であった。占領各国は１ヵ月交替で食料をベルリンに運び市民に配った。４カ国とりわけアメリカとソビエトは、より質の高い食料を少しでも多く配給しようと張り合った。ベルリンは戦勝国同士の国力を示す宣伝合戦の舞台となったのである。ベルリンの中で長い伝統を誇るフンボルト大学は、ソビエト占領地域に位置していたが、社会主義を影響を嫌う人々によって、西側地域に「ベルリン自由大学（Freie Universität Berlin)」が創設されたのもこの時期である。文献は空輸によって西側から運ばれてきた。ベルリンの境界線上の両陣営の宣伝合戦は、やがて東西の冷戦が表面化するにつれて具体的な占領政策をめぐる対立に発展し、ドイツの政治的分裂はこの時に始まる。1947年、アメリカ大統領トルーマンは、共産主義勢力の拡大を防ぐといういわゆる「トルーマン・ドクトリン」を発表。「世界の自由主義諸国は援助を求めている。米国が退けば世界平和は危うくなる。我々の責任は重大である」と主張。1948年西側３ヵ国はドイツの占領地域からソビエトの影響力を排除することに踏み切り、西側占領地域だけで、ソビエトに秘密裏の準備の後に新しい通貨に切り換える「通貨改革」が強行される（1948年６月20日)。戦後のインフレの中で信頼を失った古い通貨はすべて廃棄され、新しいドイツマルクが発行された。通貨こそはドイツは一つであることを示す象徴であったが、その絆が断たれ、戦後のドイツはまず経済的に分裂していく。西側占領地域では通貨に対する信頼が回復し、店先には再び商品が並びはじめる。だが東西の経済格差はこの通貨改革契機として次第に広がり始める。

東側を除外した通貨改革にソビエトは反発する。当時の東側のニュース映画は次のように批判する「通貨改革でドイツはめちゃくちゃに引き裂かれた。二つの国民・二つの経済－英米は再び戦争を起こすためドイツを利用するつもりだ」通貨改革は、ドイツの西半分と西ベルリンをアメリカ中心とする自由主義経済圏に組み込む狙いを持ってい

た。ソビエトの影響力を西側占領地域から排除するというトルーマンの目的はこの通貨改革で完全なものとなる。「アメリカは自分たちの占領地域を好きなようにすればいい。我々も東側を好きなようにする」とスターリンは述べたと言う。ベルリンは二人の将棋をする人によってもてあそばれる駒のようになってしまった。1948年6月の通貨改革に対抗して、ソビエトは西ベルリンに続くすべての輸送路を封鎖した。**「ベルリン封鎖」**の始まりである。東側からの電力供給も止まり、工場は操業を停止した。石炭や食料などの物不足が始まり200万市民の生活は深刻な危機に陥ることになる。当時の西ベルリンのエルンスト・ロイター（Ernst　Reuter）市長はラジオ演説で世界に呼びかけた。「世界の人々よ、アメリカや自由主義国の人々よーこの街の状況をよく見てくれ。この街を見捨てないでくれ」。西側3ヵ国は飛行機によって物資を供給することを決断した。いわゆる**「ベルリン空輸」**の始まりである。西ベルリン郊外の土地が切り開かれ空港が作られた。封鎖されていないのは空だけであった。後にこのベルリン空輸（Luftbrücke：空の架け橋）の記念碑がテンペルホーフ空港に建てられた。このような米ソの対立は再びドイツを戦場にする可能性を孕んでいた。アメリカやイギリスは世界各国から飛行機を集め物資を運んだ。3ヵ月後空輸は軌道に乗り西ベルリンはようやく危機を脱した。封鎖が続くなかで、参加国とソビエトはベルリン、モスクワそしてニューヨークで熾烈な外交交渉を展開した。ソビエトは冬になれば、空輸は失敗するだろうと考えていたが、封鎖から1年後ソビエトは何も得られないままに封鎖を解除する（1949年5月12日）。この年は予想外の暖冬であったことも幸いした。西ベルリン市民は歓喜したが、戦勝4か国による共同管理は事実上崩壊することになる。ベルリンに壁が築かれたのは、この12年後（1961年）のことである。封鎖は繁栄する西ベルリンと生活物資の不足する東ベルリンを分断する最初の見えない壁となる。封鎖解除後、アメリカにとってベルリンは自由主義の

象徴となり、ソビエトにとっては喉元に刺さった厄介なトゲとなる。冷戦下における東西両陣営のしこりはもはや抜き差しがたいものとなる。こうしてベルリン空輸を実行したアメリカのクレイ将軍は『アウフ・ヴィーダーゼーン』という言葉を残してベルリン市民に惜しまれつつ帰国の途に着いた。

戦後のアメリカの東アジア政策は中国が中心であった。中国を影響下においてアメリカの威信と権益を守ろうとした。將介石の国民党へのてこ入れや日本の軍事的弱体化を意図したのもそのためである。そうしたアメリカの思惑の中で中国で内戦が起きたとき將介石の総兵力は430万、中国共産党は120万で、国民党が圧倒的な優勢を誇っていたが、国民は中国共産党を支持する。後に国民党は台湾へ移り「中華民国」を建国する。地球の東西におけるこの冷戦構造を決定的にしたのは1950年の「朝鮮戦争」であった。1949年４月にはNATO〔北大西洋条約機構〕が成立。西ヨーロッパとアメリカは軍事同盟を結ぶ。これでソ連からの脅威が薄らぐと考えたからである。同年８月にはソ連がアメリカに続いて核実験に成功する。

1949年５月、西ドイツ〔＝ドイツ連邦共和国〕が誕生する。封鎖解除から19日後、アメリカからの経済済援助「マーシャル・プラン」を全面的に受け入れることで飛躍的な発展を遂げようとしていた。その５ヵ月後東ドイツ〔＝ドイツ民主共和国〕が建国され、ここにドイツの分断が決定的となる。東独は建国当初から同じ民族の国－西ドイツと競い合わなければならないという宿命を追っていた。その役割を担ったのは社会主義統一党の党首であったヴァルター・ウルブリヒトである。ソビエトで政治教育を受けた彼は社会主義建設でこの宿命を果たそうとする。しかし東独は大きなハンディキャップを背負っていた。戦争賠償としてソビエトは多くの工場や生産施設を解体し本国に持ち帰ったからである。鉄道の線路さえも接収の対象となった。アメリカはいち早く接収を取り止めて積極的援助に方針がかわっても、東独は

依然としてソビエトへの過酷な賠償に追われていた。ソビエトでも反対意見があったが、祖国をめちゃくちゃにした『ドイツ憎し』の感情論が反対意見を押し切った。さらに戦前のドイツの経済を支えていた製鉄のための良質の炭鉱は西ドイツ側〔ライン川流域のルール地方〕にあったため、東独はゼロからの出発を余儀なくされた。西側に対抗するために労働者には次第に厳しいノルマが課せられるようになっていく。こうした時期に政治が生み出すのは「労働英雄」という民衆分断政策である。西との経済格差は広がる一方で、西独では建国から3年後貿易が黒字になったのに、東独では食料の配給制度がまだ続いていた。東西の生活水準の差が明確になってきたため、この頃すでに西独への市民の流出は大きな問題となっていた。1952年、突然東独は西独との国境線を封鎖した。公式には西独からの妨害工作を防ぐためと発表された。本当の理由は熟練した労働力の流出阻止にあった。やがて国境には地雷が敷設され、自動射撃装置が備えられる。国境線は東独が最初に築いた壁であるが、冷戦の最中東西ベルリンの境界線に手を着けることは出来なかった。この時以来東独から西側に出ようとする市民はベルリンに向かうようになる。

1953年6月17日、労働ノルマの引下げを求める建設労働者のストをきっかけに大規模な暴動が起きた。デモ隊の要求は自由選挙の実施などを含み次第に政治的なものになっていく。東ベルリンに駐留するソビエト軍は、ラジオを通じて戒厳令を布告する。同時に戦車を投入してポツダム広場の民衆に発砲する。ベルリンに触発され東独の200ヵ所で起きた暴動も含めて夕方にはすべて鎮圧された。戒厳令による即決裁判では100人以上が銃殺されたと言われている。東独国民は絶望の淵に沈む。この年に西への移住を求めた人々は39万人に及ぶ。国境を封鎖しても人の流れは阻止することが出来なかった。ベルリン暴動と、人口の8％にも及んだ相次ぐ人々の脱出は、ウルブリヒトに強い衝撃を与えた。社会主義建設を急ぎ一刻も早く西独に追いつくことが

彼に残された選択であった。当時のベルリンは東西二つのマルクが混在していたが、人々は賃金の高い西ベルリンで仕事をし、東の安い消費物資の多くも西に流れていった。人々の流出だけでなく、西ベルリンの存在そのものが東独の足かせとなりつつあった。

1958年、ウルブリヒトは3年で西に追いつくという演説を行った。党幹部にはその実現を危ぶむ声もあった。彼の自信のかげには東独に作られた製鉄の町スターリンシュタットの成功があった。しかしその成功の陰で全国の生産現場では労働者の不満の声が次第に高まっていた。政府は重工業に資金を投入し、それ以外の産業では生産が鈍ってしまった。ウルブリヒトの口約束は色あせたものとなる。合わせて農業も集団化されていく。土地（私的所有）を手放すことを拒んだ農民は逮捕された。農業生産にもノルマが設定され人々の作業は深夜にも及ぶ。急激な工業化と農業の集団化でウルブリヒトが直面したのは再び増える市民の脱出である。1960年、東独を去った市民は20万人に達し、その半数は25歳以下の若者たちである。建国以来東独の失った国民は述べ270万人となり、東ベルリンだけでも人口の減少は10パーセントに達した。やがて社会のあらゆる職種に隙間ができていく。

1961年3月、ウルブリヒトはある決意を秘めてモスクワにおけるワルシャワ条約機構の会議に臨む。だが彼のその秘めた決意（壁の構築）は、参加国の賛同を得られなかった。6月にはウィーン会議で、ケネディ大統領とソ連のフルシチョフ首相との会談が行われた。この会議の頃、西ベルリンではある噂が広がっていた。『近いうちに東独政府は国民の流出を防ぐために何か強硬な手段を取るかもしれない』—この点を取材した外国人記者団の会見でウルブリヒトはこう答えた。「西では我々が建設労働者を集め壁を作るという噂を流している。そんな計画を私は知らない。現在建設労働者は住宅建設のために働いている。壁を作ろうなんて誰も考えていない」彼が公の場で『壁（die Mauer）』という言葉を使ったのはこの時が初めてである。ウルブリヒトはその

2か月後の8月再び極秘のうちにモスクワに飛び、フルシチョフから壁構築の承認を取り付ける。壁が建設される8日前のことである。

1961年8月13日の深夜、突如として東西ベルリンの境界線が、有刺鉄線で封鎖される。西への逃亡を図る市民は有刺鉄線にひっかかり血まみれになりながらも脱出を図るが、やがて強固なコンクリート製の高さ4mの壁が構築されていくことになる。この壁を東独は、社会主義のための「守護の壁」、西独は自由主義を踏みにじる「恥辱の壁」と呼んだ。壁はその裏と表において、まったく別の意味づけがなされることになった。アメリカの上院議員ロバート・ケネディ（ケネディ大統領の実弟）はかつてこう語った。「古来、人間は外敵から民衆を守るために壁を築いたことはあったが、民衆を閉じ込めておくために壁が作られたことは今だかつてない」と。

4．壁の建設から25年後　～崩壊の3年前～

壁の建設から、25年後、「朝日新聞」は次のような社説を掲載した。**自由を問いつづける「壁」**〔1986年8月14日『社説』〕（原文の漢数字はアラビア数字に書き換え、スペースの都合上一部の段落を繋げてある）

「ベルリンの壁」が出現して、13日は25周年であった。なぜ4半世紀前、こんなものをソ連・東独がつくったのか、理由さえ知らぬひとのほうが今では多いだろう。だが「壁」はベルリン市民を東西に引き裂いたまま、しっかりと根を張ってしまった。

あのころ（1961）、東独の社会主義経済は不振のどん底にあえぎ、強引な農業集団化も手伝って、日に何千人という国民が西ベルリンへ逃げてきた。1949年の建国以来、「自由への逃走」は3百万ちかい。この奔流をせきとめなければ、まちがいなく東独は存亡の危機に立つ。これを救う手段が「壁」だった。「壁」に閉じ込められては、東独の

人びとはもはや西へ移れない。「ヒトラーの強制収容所の再現だ」と西側はいきりたち、口をきわめて東側を非難した。しかし、もし腕づくで「壁」を破壊したら、第3次大戦さえ覚悟せねばならぬ。西側は涙をのんで静観するしかなかった。亡命や移住は、国民が政府に突きつけた不信任状、絶縁状だ。これを「壁」で押さえ込んだ東独は、恥の上塗りをしたようなものだった。それでも、今になってみれば「壁」はたしかに東独をすくった。亡命の奔流は完全にとまり、国民のあきらめも加わって、東独政権ははじめて安定を得たからである。いまソ連をしのぎ、東欧屈指の経済発展を誇るまでになったのも、「壁」に守られたからこそのことだ。逆に西ベルリンはしだいに生きがいを失っていった。東独という赤い大海に浮かぶ小島に似たこの町は、市財政の半分を西独政府によってまかなわれている。それでも「壁」以前は、東独からの亡命者を受け入れる希望の灯台だったし、「自由」を見せつけるショーウインドーという役割があった。それがすべて「壁」とともに消え、半永久的に財政援助を仰ぐお荷物の色あいが年ごとに濃くなっている。「壁」構築の当時、220万を数えた西ベルリンの人口はとっくに200万を割った。さまざまな特典つきの誘致にもかかわらず、現状を維持するだけでも容易ではない。世界的な大都市集中化の流れにも逆行する現象だ。

だが、西ベルリンは西側にとって、ただのお荷物だろうか。この25年間、市民にかぶさった「壁」（東西分割）という運命は、自ら選んだものではない。かれらは、米ソ対決という国際政治の帳尻を最末端で払わされている犠牲者である。そのことを米ソをふくめて世界はほとんど忘れているかに見える。もし東西両陣営がほんとうに緊張緩和と平和共存をめざすならば、「ベルリンの壁」を放置することはできないはずだ。いま「壁」を撤去したら、東から西への市民大移動が必ず再現するだろう。その危険がある限り、東側は「壁」を維持するほかない。「壁」をなくすには、まずその両側をできるだけ均質化する

ことだ。それも経済面だけではなく民主主義的自由が東西にひとしく行きわたる必要があるだろう。と考えれば、「壁」の撤去は絶望に近い。それでも、ヘルシンキ宣言で35ヵ国が誓いあった「人間と情報の自由な交流」が実現すれば、「壁」以前のような死に物狂いの脱出は必要がなくなるだろう。これもまた東側が果たすべき約束であるはずだ。「壁」は西側にとって暗い重圧だが、それ以上の重さで東独政権にのしかかる「自由」の証人であるかもしれない。そして平和共存のバロメーターなのである。

筆者が東独を訪れたちょうど1年後の社説であるが、これがおそらく当時の日本のメディアの平均的視点だったと考えられる。すなわち、誰も1989年に「壁」が崩壊するだろうとは考えていなかったからであり、東独という国家の存在は、日本という国が地図上から消滅しないのと同程度の確率で、半永久的に存在するだろうと考えられていたからである。人間は、どうしても目の前の既成事実を前提として思考することは止むを得ないとしても、もしも「壁」が崩れればという仮定、いわば既成事実を引っ繰り返すような思考法も確かに存在していいはずである。1985年西ドイツのヴァイツゼッカー大統領は「荒れ野の40年」と称する有名な演説を行い、ドイツの戦争責任を明確に反省しつつ、ヨーロッパの一員として自らの責務を果たすことを高らかに歌い上げた。1987年9月、東独の国家評議会議長のホーネッカーは公式に西ドイツを訪問。空港には東西両ドイツの国旗が掲げられた。

こうして、1980年代に入って間もなく、先述のように日本の家電メーカーが開発したVHSビデオテープは、思い切った技術公開が功を奏して、世界のビデオテープの規格サイズとなっていく。それは日本の戦後経済の制度疲労が明らかになるわずか数年前のことである。

5．ドイツ社会文化論のための ビデオ・アーカイブ〔1987年－1994年〕

以下で紹介するのは、1980年代後半から筆者が収集を開始した映像資料を年代的に列挙したアーカイブである。主要な映像媒体は、市販ビデオ、市販レーザー・ディスクであるが、そのほとんどは、NHK〔総合テレビ〕・ETV〔教育テレビ〕・BS1／2〔衛星第1・第2放送および民放〕などの放映番組である。なお、原稿執筆時点における筆者の番組に対するコメントは◆の後に簡単に記したので合わせて参照されたい。

1．**「戦争と都市・ベルリン」**（Cities at War - Berlin）〔1968年・制作：英／グラナダTV・62年〕イギリスで放映されたテレビ番組であるが、日本ではビデオとして市販された。〔日本発売年1990年・大陸書房〕1944年頃からベルリンは日夜の空襲で痛めつけられた。それでも市民は人生を楽しむことを忘れず、最終的勝利を信じていた。1945年、空襲は激しさを増し、国内に残っていた老人や少年までが国土防衛軍として戦うことになった。しかし、米英ソの大軍は次第にベルリンに迫り、最後の決戦の時が近づいていた。ついにソ連軍が市内に突入。ヒトラーは自殺し、1945年5月ドイツは無条件降伏した。国内ではナチスに対する支持率がいちばん低かった都市ベルリンは皮肉なことに最も激しい攻撃を受け、1989年11月にベルリンの壁が崩壊するまで東西に分断されるという悲運に見舞われる。

2．**「マリア・ブラウンの結婚」**（„Die Ehe der Maria Braun“ 1978年・西独）監督／原案：ライナー・ベルナー・ファスビンダー（Rainer Werner Fassbinder）。1960年代以降に映画運動の一時期を作った「ニュー・ジャーマン・シネマ」の旗手ファスビンダーの代表作。主人公マリアは第2次大戦のさなかに結婚し、翌日には夫を戦場に送り出した。終戦を迎え、夫の戦死を知らされた彼女は占領軍の黒人兵士と親しくなり彼の子を宿す。やがて死んだはずの夫が復員してくる。ひとりの女の生きざまをとおして、戦後10年間の西ドイツの経済復興の陰で生きた名もない庶民の真実を問う作品。

映画は、1954年のサッカーのワールド・カップで西ドイツ・チームが優勝する場面で終わる。それは、ドイツの自信回復の出発となる象徴的な出来事であった。

3．**「ドイツ・青ざめた母」**(„Deutschland-bleiche Mutter“)〔1980年・西独〕監督／脚本：ヘルマ・サンダース・ブラームス（Helma Sanders-Brahms）西ドイツの女性映画監督が、自分の母親をモデルに、戦中戦後を生きたひとりの女性の半生を描く。戦争によって夫と引き離されたヘレーナは、戦後再び夫と家庭生活を営むが、心の平和は戻ってこないままに、彼女の心はすさんでいく一方だった。娘の立場から、戦後復興期のドイツ市民の生活風景の中で母親の生きざまを冷静に眼差した硬質のドラマである。〔145分〕

4．**「春の東欧(4)東ドイツ」**〔1987年4月29日・BS2・90分〕1987年は、東ドイツ建国40周年の節目にあたる。この時期のメディアは、二つのドイツが存在する事実を前提として、東ドイツの実情がいかに西ドイツと相違するかの報告に重点が置かれ、一面では東西の「格差」を浮き彫りにしようという意図が見られる。ニュースキャスターの小室広左子は、東ベルリンにある東独の模範的機械工場に設置された特設のスタジオに2人のゲストを迎え、東独の現状についてかなり踏み込んだインタビューを展開する。ゲストは東独TV政治経済解説員とプロテスタントの牧師で、ある意味では体制派と反体制派を象徴する。この番組の特徴は東独のTVメディアから3つの事例を紹介し、それについて二人からコメントを得るという形式を取る。①AK（Aktuelle Kamera）東独の公共ニュースの代表。内容は、この年の東独の国家人民軍の削減について。②「時間との競争」東独の模範的な陶器工場に東独最初の自動生産ロボット導入の話題。内容は社会主義の目指す合理化では、生産力がのびて労働が楽になるというプロパガンダである。③「黒いチャンネル（Der schwarze Kanal)」東独の80％の家庭は西のテレビの視聴が可能で

ある。この番組は、西独で放映された番組を録画して、西側世界の腐敗性を暴こうとする政治教育番組。ゲストの牧師は、番組のプロパガンダ性が見抜かれているので視聴者は少ないし、社会主義が白で、資本主義は黒という図式の世界観は歪んでいると指摘している。テレビ論説員はメディアは政治性を持ち国家に奉仕する目的を持つと公然と述べている。事実認識としてはどちらも正しい。

5．**「ベルリン・引き裂かれた街に生きる」**〔1987年10月7日・NHK・45分〕ベルリンが東西に分断されて25年が過ぎた。だがベルリンは国際法上は米・英・仏・ソ連の4カ国による占領状態が続いていて、軍人は自由に東西ベルリンの往来が可能である。番組は二つのベルリンに生きる人たちの思いをレポートする。1987年はベルリン建都750年にあたる。フリードリヒ大王（Friedrich der Große　在位1740－1786年）は独裁者として戦後否定されてきたが、東独で再評価されてウンター・デン・リンデン通りには銅像が建てられた。ベルリン大聖堂（Berliner　Dom）は爆撃で瓦礫の山と化したが、戦後長い時間をかけて復元されてきた。東ドイツには4人しかいないと言われる金箔マイスターのアルフレート・シュルツェさんは内装工事の中心者となっている。彼は言う「ベルリンっ子にとって、ベルリンはベルリンです。東であれ、西であれ－ベルリンは一つですよ」。8か所ある検問所の一つヴォルフラム通りの検問所における、分断した肉親や友人との再開の風景は、毎朝繰り広げられる風景で25年間少しも変わっていない。シュルツェ夫妻も西ドイツから来る従兄弟を待っている。西ベルリンの酒場－創業110年になる女主人エルビラ・レイディケさんも、生粋のベルリンっ子で酒場の3代目。店で出すシュナップスはすべて自家製。酒場では時おり分断国家について、熱い議論が戦わされる。古書店を営むペーター・ゼブリンさんは、壁が墓地の真ん中にできてしまったため、父親の墓参りが許可されなくなってしまった。開店の準備の合間にレイディ

ケさんは心情を吐露する。「時々こう考えるの、正義はどこへ行ったんだろうってね。人間って本当にバカよ。大衆はアホだわ。誰かがハイル・ヒトラーと叫ぶと－国民全部くっついていったんだから。当時、私たちはなんだっけ！枢軸国－そう、私たちは日本と同盟していたんだ。当時私も若者として日本人を尊敬していたわよ。ベルリンにはきっと『宿命』ってやつがあるんだわ。今は政治の街－それが私は我慢ができないの。また昔のような芸術の街になればと思うわ」

6．**「決め手は心のトレーニング～東独・金メダル大国の秘密」**〔1988年8月1日・NHK・45分〕東ドイツで1965年に始まった青少年スポーツ大会「スパルタキアード」は、オリンピック選手になれる登竜門でもある。この大会のスローガンは、Spartakiadessieger von heute, Olympiakämpfer von morgen（今日のスパルタキアードの勝者は、明日のオリンピックの戦士）。この国はスポーツを社会主義国家建設の柱にもしている。1968年のメキシコ大会の金メダルは9個、1980年のモスクワ大会は一挙に47個となった。この大会は、ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議して西側諸国はボイコットした。番組では東独各地にあるトップ・スポーツクラブに付属する「青少年スポーツ学校（Jugendsportschule）」の取材を厳しい条件つきで許可された。世界最高水準と言われる東独の科学的スポーツ・トレーニング／スポーツ医学の実態をレポートする貴重な映像資料である。◆近年になりスポーツ選手のドーピングすなわち薬物使用が問題となっているが、スポーツ科学の発達した東独においてこの問題が全く扱われなかったはずはないのであるが、番組放映当時はまだドーピング自体が未知の単語であった。

7．⇨関連映像資料：**「世界最速を作りだせ～米・陸上エリート養成クラブの挑戦」**〔2000年9月9日・NHK・50分〕

8．**「マレーネ」**（„Marlene“　1986年）監督／脚本：マクシミリア

ン・シェル（Maximillian Schell）。晩年のマレーネ・ディートリヒ（Marlene Dietrich）は、マスコミ嫌いで通し、パリのアパートでひっそり暮らしていたが、かつてアメリカ映画「ニュールンベルグ裁判」で共演したことのあるドイツの名優マクシミリアン・シェルがインタビューをもとにしたドキュメンタリー映画として、マレーネの強烈な個性を映像化することに成功し、1987年ニューヨーク映画批評家賞を受賞した。「私が毎日、昔の古い映画を見て、懐かしがって、ただ寂しく暮らしていると思ってるなんて！」－「90分の映画で何が語れるって言うの！」ドイツ映画の黄金時代、1930年代からハリウッドの1940、50年代の伝説の映画スター、マレーネ・ディートリヒの魂は、あの脚線美とともに、今なお健在である。現在の自分を登場させることを拒絶したマレーネが、この映画の中で披露するのはあの妖艶な声である。そして語りだされるのは、めぐり会った巨匠たちへの辛辣な批判、ヒットラー嫌いながらも故郷ベルリンに馳せる思い、ヘミングウエィをはじめ彼女の愛した男たち、そしてウーマンリブ運動についても語る。〔日本ではレーザー・ディスクで発売された。発売元：パイオニアLDC〕◆1992年の5月に生涯を閉じたマレーネの遺体は、ベルリンの墓地に埋葬された。埋葬に際してはベルリン市民の間には賛否両論という心のわだかまりがあった。なぜなら、第2次大戦中マレーネは連合軍の兵士を慰問し戦意高揚に活躍したことをベルリン市民は忘れていなかったからである。現在彼女はフリーデナウの墓地に静かに眠っている。

9．「社会と文化・社会主義の国々～東ドイツ～」〔1988年2月5日・ETV『高等学校講座：世界人とくらし』30分〕現在、社会主義の国家は、全陸地面積の4分の1、人口の3分の1、工業生産の3分の1を占める。第2次世界大戦後、社会主義国は領域を広げ、中でも東独は社会主義の「優等生」と言われている。その経済発展の要因は、歴史的背景として戦前からすでに高度な産業基盤が形成さ

れていた資本主義国であったことによる。東西の人的交流に関しては、制限つきで行われている。◆番組では、東西ドイツの生活水準の格差が縮まりつつあるという楽観的な見通しが述べられているが、現実に東独生活を体験した筆者には疑問が残った。実質的には東西ドイツの経済格差は開きつつあったから、この番組の一部は現在では「誤報」と判断せざるを得ないものがある。

10. **「ヴアンゼー会議」**（„Wannsee-Konferenz“　1988年・西ドイツ・87分）制作：マンフレート・コリトスキー、監督：ハインツ・シルク、歴史考証：シュロモ・アロンソン博士（イスラエル大学）〔日本未公開映画・ビデオのみ発売・英語字幕〕1942年1月20日、舞台はベルリンの南西郊外のヴアンゼー湖畔の瀟洒な別荘。ヒトラーの高級官僚であるSS隊長、法務大臣、通商産業大臣、占領地域の責任者そしてA・アイヒマンなど14人の閣僚が集まった。こうした第三帝国の超エリートたちが最高機密の中で集まった。85分間にわたる会議の目的はユダヤ人問題の「最終解決（Endlösung）」に効果的な手段、方法、技術および輸送方法などについて議論することであった。この会議はきわめてスムーズに行われた。製作者のマンフレート・コリトスキーは会議に列席した秘書のノートをもとに会議の様子をほぼ時間の同時進行という形で映像に再現した。〔89分〕

11. **「カルガリーのスーパースター～冬の王者・東ドイツ～」**〔1988年2月13日・NHK・45分〕東独のスポーツはなぜ強いのかーその実態を知るために番組制作スタッフは東独各地を訪れて取材する。まず強さの秘密は、スポーツが国家政策の一部に組み込まれていて全国から選抜した子供たちを青少年スポーツ学校で専門的に教育するシステムができあがっていることにある。取材チームはカール・マルクス・シュタット〔統一後、ケムニッツという旧名に復帰した〕を訪れ当時22歳のカタリーナ・ビット（フィギュアスケート）に密着取材する。彼女は18歳の時にサラエボで金メダルを獲得したスタ

ー選手である。一般の東独市民が車を入手するのに10年以上待たなければならない中で彼女はマイカーをすでに持っている。すなわちオリンピック選手は、この国では物質的にも恵まれた特権階級となっている。番組では、コーチ以外にも専門分野（心理学者・栄養士・デザイナーなど）の人間が彼女の専属スタッフとなってエリート育成のためにいかに万全の体制がとられているか、かなり詳細に取材している。

12. **「世界が日本語を話しはじめた」**〔1998年３月13日・NHK・45分〕
日本の経済力を背景に、いま世界で数百万人の外国人が日本語を学んでいるといわれる。西ドイツでは日本語特訓合宿というものも開かれた。中国では多くの労働者が夜学や独学で日本語を学んでいる。日本国内でも、日本語を学ぶ外国人が増えるに従って、民間の日本語学校や教師の数が激増している。内外の日本語教育の実情を探りながら国際化の対応が迫られている日本語教育、日本語の問題を考える。

13. **「夜と霧をこえて～強制収容所の生還者たち～」**〔1988年８月22日・NHK・45分〕ポーランドでは、第２次世界大戦で国民５人のうち１人が死んだ。アウシュビッツ強制収容所では400万人が殺され生き延びたのは２％に満たないと言われている。この生還者６人に、３年前からポーランドで取材を進めてきたフォト・ジャーナリスト大石芳野さんがインタビューし、精神面にも及ぶ戦争の深い傷痕をえぐり出す。番組で紹介される生存者の証言は苛烈をきわめる。「収容所で人は泣くことがない」「いまも夢にゲシュタポが現れる」……共通するのは絶え間ない恐怖と過去に対する異常な敏感さ。極限状態の体験が原因でいまだに消えない心と体の障害（PTSD）が、当人だけでなくその子や孫にも影響を与えるという。◆「強制収容所症候群」の存在が、最近指摘され始めている。番組では「戦争は銃弾だけが怖いのではない」という大石さんの言葉が強く心に残る。

民間のディレクターが初めて起用されたが、従来のNHKカラーを打ち破るまでには至っていない。ただ、写真とビデオの融合という斬新な手法で、見えにくいが重要な問題に正面から取り組んだ番組として評価できる。

14. **「ベルリン・天使の詩」**（„Der Himmel über Berlin“　西独・1987年）製作総指揮：イングリッド・ビンディッシュ、製作：アナトール・ドーマン、製作／監督：ビム・ベンダース、撮影：アンリ・アルカン。主にハリウッド映画界でいくつかの作品を作ったベンダースが10年ぶりにドイツに戻って作った傑作。わらべ歌に続いて、ベルリンの街、勝利の女神像の上から人々を見守っている天使ダミエルの登場。天使の耳には地上の人々の内心の声が聞こえるが光景はモノトーンでしか見えない。天使の姿は子どもたちにしか見えない。アメリカの映画スター、ピーター・フォーク〔刑事コロンボ役で有名〕が撮影のためにベルリンに向かっている頃、ダミエルは親友の天使カシエルに人間でない自分に嫌気がさすと、天使としてとんでもない告白をした。さらに、とあるサーカスで空中ブランコの練習をしているマリオンを見て一瞬、経験をしたことのない色彩を目に覚えるが、それがなぜだか分からない。天使は人間に恋をすると死ぬ。ダミエルはカシエルの心配をよそにマリオンに素直に恋してしまう。P・フォークは見えない天使に向かってしきりに握手を求め、人間になれと誘惑するが。〔パートカラー　128分〕

15. **「帰らざる兵士たち～ドイツ未帰還兵の戦後～」**〔1988年8月21日・ETV・45分〕スイス・ジュネーブにある赤十字国際委員会中央安否調査局には、戦争で行方を絶った肉親の安否をたずねる手紙が世界中から届く。第2次世界大戦後40年余り経てもなお、夫の生還を信じつづける老婆。ソ連で捕虜になったという父親を捜すルーマニア女性。これらの手紙からは、戦争によって肉親との間を割かれた人々の人間模様が浮かび上がってくる。委員会の活動を通し、

戦火が消えても、癒されることのない戦争の傷痕を描く。◆1980年代に入り、日本でも中国残留孤児の訪問調査が活発に行われたが年を追う毎に判明率は低下、さらに肉親が存在していても名乗り出ない人々も多数いた。残留孤児の肉親探しは現在も細々と続いている。関連映像資料⇨16.

16. **「残された姉妹～最後の残留孤児調査」**〔2000年1月31日・NNNドキュメント・TeNY・30分〕

17. **「生きる希望を伝える～映画監督ビム・ベンダース・大島渚と語る～」**〔1988年8月23日・ETV・45分〕世界的に注目されている西独の映画監督のビム・ベンダース（Wim Wenders）氏。新作「ベルリン・天使の詩（Der Himmel über Berlin)」では、主人公の行動を通して、我々が忘れがちな人間であることのいとおしさ・素晴らしさを描いている。東京が重要な舞台となる次回作〔『東京画』〕のために来日したベンダース監督と、映画監督の大島渚氏の対談を紹介する。現代を生きることの困難と新たな希望、また一貫した主題として描いてきた旅や家族について、氏がどうとらえているのかを浮き彫りにする。

18. **「リヒャルト・シュトラウスその愛と悲しみ～今よみがえる幻の祝典曲～」**〔1988年11月21日・TNN＜日本テレビ系列＞・52分〕『ツァラトゥストゥラはかく語りき（Also sprach Zarathustra)』で有名なリヒャルト・シュトラウス。彼は第2次大戦前夜、日本建国の祝典曲を作曲していた。この曲の48年ぶりの再演と数奇な人生を歩んだシュトラウスの義理の娘の姿を追う読売テレビ開局30周年記念番組。昭和15年（1940年）すなわち太平洋戦争が始まる前年、日本は建国紀元を祝うため世界各国に祝典音楽の作曲を依頼した。ドイツのナチス政府はシュトラウスに作曲を要請した。彼はナチスの政策に反発していたものの、息子の嫁アリスの助命を条件に引き受ける。彼女はユダヤ人であった。こうした経緯で書き上げられた

のが『建国2600年祝典曲』。この曲が48年ぶりに東京・サントリーホールで再演された。大原れいこディレクターは再演の模様をビデオに収め、西ドイツ・バイエルン州ガルミッシュの山荘に住むアリスを訪問。今年83歳になる彼女は、自分の命を救った曲を48年ぶりに聴いた。そして終戦直後に亡くなった義父と秘密警察の目を逃れて暮らした日々を振り返る。アリスの住む山荘で発見されたシュトラウス直筆の楽譜には『天皇陛下にささげる』(dem japanischen Kaiser gewidmet）というシュトラウスのサインが記されていた。

19. **「最底辺・西ドイツの外国人労働者」**〔1988年12月2日・NHK・45分、制作：カオス＆ピラト・フィルム／西独1987年〕西ドイツの産業を底辺で支える100万人を越すと言われる外国人労働者の姿を描く。トルコ人を中心に、外国人労働者が数多く西ドイツで働いている。職種はドイツ人が嫌ういわゆる3K労働。工場の末端作業。低賃金で無保障、多くは日雇いで、奴隷商人と呼ばれるもぐりの手配師が仲介し、給料をぴんはねしている。ドイツ人ジャーナリストギュンター・バルラフは、瞳や髪の色を変えトルコ人になりすまして、劣悪な労働環境を隠しカメラを用いて体験ルポしたドキュメンタリー。

20. **「オペラ・ブームの舞台裏」**〔1988年12月5日・ETV・45分〕11月13日、西ドイツ・ミュンヘン・バイエルン国立歌劇場の引っ越し公演が日本で始まった。演目はワーグナーの楽劇が中心となる。「ニュルンベルクのマイスタージンガー」は1868年－『明治維新』の年にミュンヘンで初演が行われ、それから120年後日本で初公演となった。1988年は、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場、ミラノのスカラ座が相次いで来日－「オペラの年」となった。バイエルン国立歌劇場の引っ越し公演では430人が来日するという大規模なものとなる。番組では、こうしたオペラの引っ越し公演を可能にする要因について紹介する。まず第1は、日本のオペラファンの音楽への

情熱とそれを支えている経済力であることは言うまでもない。さらに第２の要因は、大道具／小道具などオペラを裏で支える日本人技術スタッフのチームワークである。主要な歌手〔ルチア・ポップ／ルネ・コロなど〕のインタビューからは日本が重要な音楽「市場」であることは認めつつも、日本人の高い芸術意識の前で自らの芸が正当に評価されるようにしたいという意気込みと熱気は間違いなく伝わってくる。◆時はまさしく狂乱物価の時代で、一般の国民が家を持つという夢が一時的に遠のいてしまった。海外旅行や、車を持つということで物質的な欲望を満たしている時代でもあった。そのような時にオペラの高価なチケットがすぐ売り切れてしまう状況は、庶民のうさ晴らしという側面がないとは言えない。だが注目していいのは、開局20周年を迎えた中京テレビという民間企業の主催であるという点であり、あくまで一企業の記念事業であり興行収益という採算は考えていないという。もちろん協賛する日・独企業はあるが、他面において日本という国の文化行政の貧しさもかいま見させる番組内容となっている。

21. **「いま、子どもに何を書くべきか」**〔1988年12月８日・ETV・45分〕ドイツを代表する児童文学者ペーター・ヘルトリング氏が11月に来日し、日本の児童文学者たちと「なぜ子どもに向けて書くか」をテーマに、各地でシンポジウムを行った。11月10から12日にかけては、大阪国際児童文学館において『西ドイツ・日本・児童文学シンポジウム～児童文学に見る今日の＜子ども＞～』が開催され、パネリストとして作家の上野瞭、佐野洋子、ビネッテ・シュレーダーそしてＰ・ヘルトリングが参加。今、子どもたちの姿や現実が児童文学の中にどのように反映されているか、子どもの置かれている状況をどのように捉えていけばよいのかについて、子どもを取り巻く状況が似ていると言われる日本と西ドイツの現状を踏まえながら３日間活発な討論が行われた。◆ヘルトリング氏の児童文学の特徴の

一つは「現実」を書くことであり、この点はファンタジーを重視するM・エンデとは対照的である。番組は、評論家：清水真砂子氏との対談の形式をとり、氏の創作姿勢と私生活との関わりについて、氏の素直な人柄が滲み出る形での対話がきわめて快くはずむ。

22. **「ヒトラー・コレクションの謎」**〔1989年1月20日・NHK・50分〕アドルフ・ヒトラーが若い頃、ウィーンの美術学校の受験に二度も失敗したことは良く知られているが、彼はナチスの政権掌握後も芸術への執念を示し続けた。1937年にはミュンヒェンにおいて「大ドイツ美術展」を開催。アーリア民族の優秀性とナチス流の健康な肉体美を礼賛する展示と同時に、ユダヤ人の芸術を徹底的にこきおろす「頽廃芸術展」も開催するという巧妙な政治的プロパガンダも仕掛けていた。1939年のポーランド侵入から第2次世界大戦が勃発。間もなくパリを占領したナチスは用意周到な「芸術品」の略奪を開始する。ナチスの絵画略奪とそれを阻止しようとするフランス・レジスタンスの活躍のいきさつは次の映画で詳しく描かれている。

「大列車作戦」（'The Train' 1964年　米＝仏＝伊〕監督：ジョン・フランケンハイマー。主演：バート・ランカスター、ジャンヌ・モロー他。（B&W　134分）ヒトラーは、パリの都市景観の美しさに強く嫉妬した。側近シュペーアは後にヒトラーは次のように語ったと証言している。「自分は前からパリを破壊するつもりでいた。ドイツに勝る都市は許せないからだ。だが我々はベルリンをはるかに美しい都にする。よってパリは破壊せずこのままにしておく」だが、ナチスのパリ撤退の際にヒトラーはパリの徹底した焦土化を指令した。このあたりのいきさつは次の映画で描かれている。**「パリは燃えているか」**（'Is Paris burning?' 1966年　仏＝米〕監督：ルネ・クレマン。主演：アラン・ドロン、カーク・ダグラス／イブ・モンタン他。（B&W　138分〕略奪された膨大なコレクションは戦局の悪化とともに行き場を失い、戦争末期にはオーストリアの岩

塩鉱の地中深く秘匿されることになる。最も悲劇的なことは、美術品の元の持ち主がユダヤ人のほとんどが亡くなり、国家所有になってしまったということである。

23. **「ドイツ・日本～戦後政治二つの軌跡～」**〔1989年１～３月・ETV『市民大学』講師：大獄秀夫・12回×45分〕戦後から復興へ、日本とドイツは、どのように歩んできたのか。両国を取り巻く国際政治環境がもたらす占領政策の違い、東西冷戦構造への対応、さらに吉田茂、アデナウアーを中心とするそれぞれの指導者の思想が、憲法問題、再軍備問題など戦後政治の動向を導いてきたとも言える。番組では、それぞれの戦後の道程を詳細に論じ、激動する世界の中で日本とドイツの戦後の原型を示す。◆結果論ではあるが、1989年－まさにこの年の11月にベルリンの壁が崩壊することを番組放映当時は筆者を含めて誰も予期していなかったわけである。結果的には時期を得た番組であったという事が言えよう。⇨関連映像資料：**24. 25.**

24. **「戦後政治体制の構想～吉田茂と南原繁～」**（『歴史でみる日本』第39講　2001年月６日・ETV・30分〕

25. **「日米の抱擁～ジョン・ダワーが語る戦後日本の原点～」**〔2000年８月15日・BS２・75分〕

26. **「ヨーロッパ激動の20世紀・第８回『ファシズム』」**〔1989年４～７月・BS１・13回シリーズ・制作：BBC／英〕リポーター：ピーター・ユスチノフ、構成／台本／出演：ジョン・テライン。　ヨーロッパの90年の歴史を振り返る長尺のドキュメンタリー番組。第１次大戦後ドイツでは最大で600万人の失業者が溢れていた。1933年ヒトラーは政権を掌握すると、すぐさまベルサイユ条約・軍備制限の条項を一方的に破棄し、空軍の再建・徴兵制による再軍備に踏み切る。そこには「国際連盟」が担うはずであった集団安全保障の虚構性が露呈していた。ヒトラーが首相になった時（1933年）は1700万票を集めたが過半数には至らなかった。1934年８月ヒンデンブル

ク大統領の死後、親衛隊と警察の監視の下に国民投票を行うと90パーセントの指示を獲得、自ら総統（der　Führer）と名乗り、自由な思想や文化が抑圧されていくことになる。彼は政敵や共産主義者弾圧の為に強制収容所をつくり、次第にユダヤ人への排斥運動もエスカレートしていく。ムソリーニのイタリアはもとより、イギリスにおいてもデズーリの率いる極右ファシズムの動きが見られたことは注目していい。番組では、第2次世界大戦の前哨戦とも言えるスペイン内乱の説明に力点が置かれている。この内乱には1960年代北ベトナムを率いてベトナム戦争を闘い抜いた指導者ホーチミンも参加している。◆ナチスの再軍備の過程で、戦争を目的とした青少年の国民的鍛練が注目される。ナチスは、スポーツ・登山・キャンプなどの集団行動や規律をたたき込んでいく。東独のスポーツへの情熱は、反ファシズム国家としての出発と、どこかでちぐはぐさが目立つというより、むしろ東独の国策としてのスポーツと健康な肉体美の礼賛はナチスの継承者と見れなくもない。また番組はヨーロッパなかんずくイギリスから見た西欧歴史であり、ファシズム対自由主義という対立図式の中では、アジア・アフリカの植民地収奪構造と抑圧は、当然ながら視野に入っていない。

27. **「揺れ動くベルリンの壁」**〔1989年9月10日・TNN（日本テレビ系列）『あすの世界と日本』解説：堺屋太一・30分〕1989年2月、東西ベルリンの国境となる運河に7発の銃声が響いた。泳いで渡ろうとした東独の19歳の青年が撃たれて死亡、彼は壁を越えようとした78人目でそして最後の犠牲者となる。その一方で毎日チャーリー検問所を通って東ベルリンから出稼ぎに西側にきている市民も大勢いる。200人とも2000人とも言われ正確な数は不明。こういう形での人的交流が地下水脈のように広がりつつある。さらに東側のアウトバーンの建設には、西からの資金援助が行われている事例もある。ベルリンの壁は、東西の経済格差が消滅した時に消えると言われて

いるが、実際は格差は広がりつつある。他方東欧の民主化の中で東独はかたくなに一党独裁を守っている。しかし東西緊張緩和の波は、ひたひたとベルリンの壁にも押し寄せつつある。主な取材場所：オーバーバウム橋（東の年金生活者や家族訪問を許可された人が歩いて東西ベルリンを行き来した橋）／壁博物館（東独からの脱出者の足跡を展示）／アンハルター駅の廃墟跡。◆番組の２か月後に壁が崩れることは、番組製作者も堺屋氏も明確には指摘していない。もちろん誰にも予測できないことである。ただこの番組のタイトルだけが、妙に予言めいているのが注目される。

1989年〔平成元年〕11月９日　ベルリンの壁崩壊

28. **「壁崩壊」**〔1989年11月11日・ニュースプラス１（徳光和雄）・TNN〕

29. **「NHK ニュース TODAY 特集～ベルリンの壁・28年目の開放～」**〔1989年11月11日・45分〕　11月９日、東独のシャボスキー政治局員が緊急記者会見を行い「市民の移住と出国の自由化」を発表。国営テレビ（Aktuelle Kamera）もすぐさまこの会見の模様を報道、事実上壁の存在の意味はこの時点で消滅した。ニュースを知った市民は真偽を疑いながらも雪崩のように検問所に殺到－28年ぶりの東西ドイツ市民の交流がこの夜に始まった。スタジオ・ゲストの鴨武彦氏は、他の東欧諸国と違って、民族の分断国家という特殊要因から『再統一への悲願』が、東独の自由化・民主化のスピードに加速をつけていくだろうと予測している。

30. **「崩れたベルリンの壁～磯村尚徳の見た激動のヨーロッパ～」**〔1989年11月25日・NHK・120分〕東西対立の象徴となってきた「ベルリンの壁」が事実上崩れ去り、東ヨーロッパの変革のうねりは、今最高潮に達している。戦後の東西分割を決めたヤルタ体制の中で、

なぜ「ベルリンの壁」が構築されたのか。米ソの冷戦構造の中で苦悩してきたドイツを改めて検証する。長年にわたってヨーロッパを取材してきた磯村尚徳がベルリンへ飛び、現地取材と過去の番組資料を使いながらヨーロッパの戦後45年を振り返る。主な内容：東西国境の村の真ん中で分断された二つの村の取材／アンゲーリア・ツァルニコフさん（東ベルリン在住）1961年8月13日、母と離婚して西ベルリンに移り住んだ父のもとに遊びにいって帰る時すでに壁が出来はじめていた。父は6歳の彼女を抱き抱えて東ベルリン兵士に手渡してくれた。その後生き別れとなり、6年前父の死を知らされる。壁が崩れてようやく彼女は墓参りが実現する／壁の構築の際にベルナウアー通りで、一瞬のすきをついて銃を棄てて西側に走り込んだ元東独兵士コンラート・シューマン氏への密着取材。◆番組の最後で磯村氏は、壁の崩壊を含めて東欧諸国における民衆の手による自由化・民主化のエネルギーの源泉として、テレビ・メディアなどによる情報の力が明らかに大きかったと指摘している。映像メディアは、大衆操作の効果的手段になりうると同時に、国家権力をも打ち倒す力を秘めているということを示している。さらにこの番組では、壁の崩壊という誰も予想しなかった20世紀後半の歴史のエポックを捉える時に、過去にNHKが放送してきたドキュメンタリー番組を、参考例として多く引用していることである。もちろんそれは部分的引用にとどまるものの、それぞれの番組の作成当時のNHKの世界の事象に対するスタンスの取り方や、番組製作の意図がかいま見えて興味深いものがある。引用番組のリスト⇨海外取材番組『東欧を行く』（1962年5月放送）／NHK特集『あの時世界は―ケネディ対フルシチョフ』（1979年1月放送）／『ワルシャワの墓標』（1978年4月放送）／『労働者の反乱～ポーランドからの報告』（1980年11月放送）／『東西国境5000キロの旅』（1985年6月放送）

31. **「ベルリン・不思議の壁」**〔1989年11月26日『新世界紀行』TBS・54分〕キャスター：荒川恭啓：「今月の9日、東ドイツ政府は突然、国境を開放いたしまして、事実上ベルリンの壁は崩壊しました。誰もが予想し得なかった、まさに歴史的瞬間に我々は立ち会っています。」番組は緊急企画として「衛星中継」と、崩壊前の取材映像を用いて壁崩壊に至る過程と、崩壊後のベルリンの素顔を伝える。壁の向こうにブランデンブルク門を見渡す西ベルリン地域で市民同士が熱い議論を戦わせる。「ドイツを統一するんだ！」「いったいどうやってドイツを統一させるんだ？」「壁をなくして一つの平和な国家にするんだ！」「でもその国をどういう制度の国にするんだ？壁はドイツの問題じゃなく、社会主義と資本主義の対立の問題なんだ。ドイツだけで解決できる問題ではなく、アメリカとソ連が解決すべき問題なんだ。」「でもベルリンはドイツの真ん中じゃないか。このままでは第2次世界大戦のツケを東ドイツの人々だけが背負ってるだろう。それをどうする気だ？」壁の前のプラカード：„Die Mauer muß fallen“「壁を撤去せよ！」その他の注目すべき内容：壁際で暮らすホームレス／クロイツベルク地区のトルコ人たち／極右勢力（ネオナチ）の台頭と外国人排斥運動。とりわけドイツの統一への熱気と、外国人労働者としていわば招かれてドイツに入ってきたトルコ人たちの微妙な立場や複雑な感情にキメの細かい取材が行われている。◆取材にあたったのは、フォト・ジャーナリストの広川隆一氏（46歳）。取材クルーは崩壊の一ヵ月前にベルリンに入っており、歴史の大変化を予感される異様な空気を映像に取り込むことに成功している。

1990年〔平成2年〕

32. **「喜びと自由への讃歌～ベルリンの壁崩壊」**〔制作：SFB（自由

ベルリン放送）／NDR（北ドイツ放送）1990年・56分・レーザーディスク〕1989年の秋、東欧も世界も変化した。民主化の波が東欧を覆い尽くし、その波は東独をも飲み込んだ。11月11日、ついに壁が壊され国境線が開放された。12月25日・聖夜、ベルリン市民に二つの素晴らしいクリスマスプレゼントが贈られた。一つはその2日前にブランデンブルク門が開かれたこと、そしてもう一つはシャウシュピールハウスのレナード・バーンスタイン（Leonard Bernstein）指揮による第9のコンサートである。バーンスタインはこう述べている。「この瞬間、まったく比類のないこの瞬間。私の長い、長い人生の中でも比べるもののないクリスマス！」と

33. 岩倉使節団の西洋見聞～米欧回覧実記を読む～(9)強弱相凌ギ大小相侮ル・ドイツ」〔1990年3月9日・NHK市民大学・ETV・45分〕幕藩体制崩壊の後に、新たな国家権力となった明治政府は政治・経済・教育・軍制モデルを学ぶために、欧米に岩倉使節団を派遣した。同行した久米邦武は『米欧回覧実記』という詳細な記録を残した。その中で当時の欧州の新興大国プロイセンについて、ビスマルク首相の食事に招待されて彼の「卓上演説（die Tischrede）」を聞いた際に次のように記している。『故ニ当時日本ニ於テ、親睦相手交ルノ国多シトイヘトモ、国権自主ヲ重ンスル日耳曼（ゼルマン）ノ如キハ、其親睦中ノ最モ親睦ナル国ナルベシト謂ヘリ…』このようにドイツを高く評価している。当時のドイツは1871年の「普仏戦争」でフランスに大勝してプロイセン帝国（第二帝国）が成立、勝利の美酒に酔っていた時期であり、国家体制についても自信満々たるものがあった。従って、使節団の目にもその興隆の勢いが魅力的に映ったとしても不思議ではない。番組の中で「岩倉使節団は、出発前すでに狙いをドイツに決めていたという歴史家も日本にはいます。ドイツにならって日本の近代化を進めるのが一番良いと考えたというのですが」という質問に対して、日本史研究者のマリウス・ジャ

ンセン氏（プリンストン大学）は次のように答えている。「それは言い過ぎでしょう。当時の指導者は、近代国家建設の共通目標は持っていました。しかしドイツを模範にすることが初めから決まっていたわけではありません。明治初頭の留学生は欧州よりも米国に注目していました。またドイツよりも英国に大勢留学しました。ドイツの制度が模範とされたのは、1880年代、明治憲法の準備に入ってからです。それ以後でさえドイツ模範論には誇張があります。日本の政治制度はドイツに比べてより民主的とまではいかなくても、はるかに貴族的専制的色彩が薄い。憲法起草に協力したドイツ人が驚いたほどです」◆この時期に哲学者ニーチェ（Friedrich Nietsche）は「反時代的考察」の中で、プロイセンの戦争後の奢りや昂りを辛辣に批判していることも見逃せない。軍事的勝利は、文化的勝利と同義でないとドイツの俗物性を批判している。もちろん久米もベルリンの『成り上がり的な都市文化』を一方では冷静に観察していることは評価してよい。いずれにせよ、その後の日本の命運を左右することになる「国のかたちづくり」において、多面的にドイツの影響を受けたという時に、この使節団とビスマルクとの一瞬の出会いが、両国のその後のかかわり合いの出発点となったことを否定することは出来ないだろう。⇨関連映像資料：34、35

34.「日本の座標軸『岩倉使節団』にみる現代の選択①自主自由の精神②「小国」に学ぶ③アジアへの視点」〔1997年１月１／２／３日・BS１・各90分〕

35.「ナポレオンとビスマルク～ナショナリズムの時代～」〔『歴史でみる世界』2000年10月30日・ETV・30分〕

36.「ドイツ統一への選択～東独最初の自由選挙～」〔1990年３月17日・NHK・50分〕東独の市民の東西ドイツ統一への思いは、壁の崩壊から急速に高まった。３月18日の選挙は、長い分断国家の歴史から統一へと、東独は現実的な一歩を進めることになる。２月20日

は「選挙法」があわただしく改正され、選挙戦が開始された。東独の地域ではナチス時代も含めて60年近く「自由選挙」が行われたことがない。旧東独時代の選挙は監視つきの選挙であった。今回1200万人の有権者は、24の政党や政治団体のどれかに一票を投ずることになる。各政党の投票数によって400人の議員を決める「比例代表制」であるが、選挙運動の最中にも東独からの人口流出が続き、すでに壁の崩壊から半年の間で50万人が国外に出てしまい、各地区の選挙管理委員会は有権者の数の正確な把握に困難をきわめている。選挙戦ではSPD（ドイツ社会民主党）が終始リードし、統一については、西ドイツで憲法を新たに作成したのちに全地域で国民投票するというゆるやかな統一論を展開している。コール首相の属するCDU（キリスト教民主同盟）は「民主主義の出発」「ドイツ社会同盟」の保守三派合同で『ドイツ連合（Allianz für Deutschland)』を結成し、基本法23条にもとづいて、東が西への帰属を決定すれば、東は西ドイツの地方州（複数）を形成するという「併合論」を全面に押し出して戦っている。旧東独の単独政権を担っていた「社会主義統一党（SED)」はPDS（民主社会党）と党名変更し、旧東独地域の非武装・中立化を主張している。いずれの選択が結果として出るにせよ、今回の選挙は、統一への大きなうねりの中で、政治体制の違いという、もう一つの壁を崩す戦いとして注目される。

37. **「バーンスタイン・自由の第九コンサート」**〔1990年3月27日・BS2・120分〕1989年12月25日、ベルリン・シャウシュピールハウスで行われたレナード・バースタインによるベートーベンの第9交響曲。多くの人々にとって忘れえぬクリスマスとなったこの日はまたバースタインにとっては「最後」のクリスマスとなった。長年の過度の喫煙のせいで深刻な肺の病が進行していた。彼の死は1999年10月14日。同性愛で結ばれていたというアメリカの現代音楽の巨匠的作曲家アーロン・コープランドの命の火もバーンスタインの後を

追うようにして同年12月２日に消えた。なおこの演奏会では、シラーの元の詩，Freude, schöner Götterfunken'『歓喜よ、美しき神々の火花よ』が，Freiheit, schöner Götterfunken'『自由よ、美しき神々の火花よ……』と変更されている点が、ドイツの文化と歴史の重層性を象徴してる。

38.「社会主義の20世紀(2)守護の壁・恥辱の壁～東ドイツの苦悩～」

〔1990年５月27日・NHK・45分〕壁の崩壊から６か月、ベルリンの都市景観は急速に変わりつつある。東側は壁を社会主義を守る「守護の壁（Schutzmauer）」と呼び、西側諸国は国民を閉じ込める「恥辱の壁（Schandemauer）」と呼んできた。『20年たったら壁は壊すつもりだった』－東ドイツ共産党の元幹部は、ベルリンの壁構築の事情を今こう明かす。社会主義経済が発展すれば国民が西に流出することはなくなるだろうという見通しからだった。人為的に分断され、建国の当初から西との競争が宿命づけられてきた東ドイツにとって、壁の構築はさまざまな模索の末に国家の存亡をかけて強行した非常手段であった。壁が崩壊した今、市民の大量流出は30年前を上回る規模である。加速する再統一の動きに対し、東独は壁の消滅とともに急速に国家の存在理由を失おうとしている。ベルリン陥落から連合軍の占領、国境閉鎖、壁の構築へと突き進んだ戦後の政治事情や「壁」をめぐる東独の現在につながる苦悩を伝える。◆番組で興味深いのは、東西ベルリンで占領国が廃墟のベルリンに建設を急いだのは「映画館」であったということである。映画館は主に後に東西ベルリンの境界線の近くにおよそ220館作られ『境界線映画館』と呼ばれた。ベルリンは、東西両陣営の映像によるプロパガンダが宣伝合戦の場となったわけである。ソビエトは映画技術の粋をつぎ込み社会主義の素晴らしさをアピールした。新しく作られた映画もアメリカ、フランス、ソビエトなどで公開される以前にベルリンで上映されていた。やがてプロパガンダはエスカレートし、相

手の政治システムの露骨な批判が行われていく。

「**社会主義の20世紀**」のシリーズ・タイトルは以下のとおりである。〔放映はすべて1990年、月日は省略〕プロローグ①バルトの悲劇②守護の壁・恥辱の壁～東ドイツの苦悩③一党独裁の崩壊④カストロの選択～米ソはざまの30年⑤ポーランド市民革命～『連帯』10年の軌跡～⑥押しつぶされた改革～プラハの春・ドプチェクの証言⑦ベトナム戦争～15年目の真実（⑧最終回）歴史の空白は埋まるか。

39. **「翼に乗ってきた天使たち」**〔1990年6月1日『子どもパビリオン』・NHK・45分〕西ドイツは、難民と認めれば国がドイツ語を学ばせるなど積極的な受入れ制度を整備している。特に子どもの場合、人道的立場からも暖かい保護が約束されている。そのため紛争地域から単身飛来した子ども難民は1989年だけでも3000人、この10年では6000人にのぼるという。しかし急激な難民の増加に西ドイツの世論にも微妙な変化が起きている。番組では内戦で混乱するアフガニスタンから単身やってきた少年の目で難民制度の実情を報告する。この少年はドイツに行けば殺されることもないし、ちゃんと勉強もできると言い聞かされてやって来たのである。

40. **「統一ドイツへの思惑」**〔1990年6月1日・NHK『ミッドナイトジャーナル』約20分〕東西ドイツ統一に関わる米ソ首脳会談が進められている中、日本のエコノミストは統一の持つ世界経済へのプラスの影響を認め2010年頃には強大な経済国家になることを予測している。1945年、敗戦後の東西両ドイツの成立というドイツの分割は、ヨーロッパの分割であり、ひいては世界の分割の「冷戦構造」という世界秩序の中でソ連はアメリカに並ぶ世界政治への絶大な発言力を手に入れた。しかしながら、ドイツ統一の動きは、それまでの冷戦という二項対立に立脚した既得権益の放棄につながる点がソ連の苦悩となっている。こうした状況の中でゴルバチョフは、1990年1月の時点で統一やむなしの見解を表明するに至る。しかしながら統

一ドイツのNATOへの加盟は、ワルシャワ条約機構の形骸化と同時進行し、ソ連にとってはかつての大国としての地位の大きな後退を意味する。壁の崩壊に大きな役割を果たしたゴルバチョフは、数千万人の血をあがなって勝ち取ったドイツの分割をあっさり放棄することに耐えられない国内の保守派や軍部の強い反発を招くことになる。番組では主として統一ドイツの経済力の予測の中でとりわけ旧社会主義国の多い中欧への影響の強化が強調されている。また、東ドイツ通貨のマルクの西ドイツマルクへの等価による切替えによるインフレ・物価急騰も懸念される。ゲストのある専門家は統一ドイツの首都をフランクフルトであるとを予言している。◆2000年5月、ドイツ国防軍はNATOの一翼を担って、戦後初めてコソボ紛争に「軍事介入」した。NATOの大義名分は、旧ユーゴスラビア地域における民族紛争と虐殺をやめさせるための「人道的武力介入」である。

41.「20世紀の群像・カフカ～謎ときの楽しみ①現代への透視②「変身」を巡って③創作の手法④「城」の風景」講師：池内紀〔1990年6月・30分×4回〕フランツ・カフカ(Franz Kafka, 1883－1924)は、チェコのプラハ生まれのユダヤ人であるが、その作品はドイツ語で書かれたので、とりあえずドイツ文学の財産の目録に加えられている。だが、チエコというスラブ語圏に生まれたユダヤ人で、しかも使用言語がドイツ語という三重の意味での帰属性の揺れは、カフカの作品の特性に大きな意味を持っている。作品は、彼の死後30年を経てようやく1950年代に世界的に読まれていくようになる。言うまでもなく文学作品は、多義的であり、また時代の文脈の中でたえず再解釈される柔軟性を持つのは、絵画芸術・音楽芸術と共通している。だが、カフカの作品は、合理的に解釈すればするほど、その有意味性が希薄となり、同時に物語としての面白さもなくなるという特性を持っている。カフカはプラハ大学法学部卒業の後「労働

者災害保険局」に就職。仕事ぶりは実直でやがて課長にまで昇進。余暇に小説を書いた。カフカは、唯一の親友であるマックス・ブロートに遺言で自分の書いたものの焼却を依頼していたが、この誠実な友人の遺言不履行の結果、我々はカフカの多くの作品に出会うことが可能になった。⇨参考映像資料：42

42. 「審判」（'Le Procés' 1963年・フランス＝イタリア＝西ドイツ）監督・脚本：オーソン・ウェルズ。カフカの同名小説の初めての映像化。ある朝突然、当局によって『有罪』を宣告された大会社の副部長ヨーゼフ・K。だが検察官も刑事も彼の罪状を知らず、身柄を拘束する必要もないという。自由の身のまま一挙一投足を監視され、次第に疲弊していくK。呼び出された法廷は大群衆がひしめく廃劇場で、とても官僚とは思えぬ下品な司直が、無意味なおしゃべりをするばかり。さらに伯父の勧めでとある高名な弁護士を訪ねたKは、それから現実なのか空想なのかわからない奇妙な人間たちの間を往復した挙げ句にあっさりと爆殺される。◆壁の崩壊後旧東独の秘密警察の犯罪性が次第に明らかとなりつつあるが、いわばそうした監視国家で生きることの心理的不安は追体験すべくもないが、この映画により、旧東独に限らず高度に管理化された社会のもつ不条理性・個人の自由意思の抑圧というもどかしさと息苦しさは映像によってなぞらえることが可能である。〔B&W　118分〕

43. 「第2次大戦への道～ヨーロッパ・その前夜～第2回・ドイツ」〔1990年7月6日・ETV・45分〕1990年第1次世界大戦でドイツが降伏した後の「ベルサイユ条約」でドイツの旧植民地は没収、軍備も10万人に縮小、さらに莫大な賠償金を課された。フランスのドイツへの憎悪はすさまじいものがあり、賠償金の支払いは計算上は1983年まで続くことになっていた。そんな中でヒトラーは疲弊しきっていた当時の民衆に、巧みな演説と未来への夢で希望を与えることに成功した。一方、都市部の有産階級は共産主義の浸透を警戒し

ていた。弾圧により民主的な政党が基盤を失うにつれ、国民は極右か極左かの二者択一に迫られることになる。こうした状況を作りだしながら、ヒトラーは共産化を嫌う保守派の抱き込みに成功する。権力の頂点に立ったヒトラーは、やがて思想・文化・情報の統制に乗り出し、1933年３月ドイツ最初の強制収容所がミュンヒェン郊外のダッハウ（Dachau）に作られ、多くの政治犯が投獄された。他方、高速道路建設などの大規模な公共事業に大量の失業者が吸収されていった。ベルサイユ条約によりライン川の左岸(ラインランド)は非武装地帯とされていたが、1936年３月、ドイツ国防軍は橋を渡り左岸に進駐した。この軍隊は、英仏の抵抗があればすぐに撤退するように指示されていたが、英仏は何もしなかった。その５ヵ月後の８月、首都ベルリンで第11回オリンピック大会が開催された。フランス・チームはヒトラーの目前でナチス指揮の敬礼をして入場行進した。⇨関連映像資料：**44**、**45**

44.　**「民族の祭典」**（オリンピア第一部）1938年・独116分・**「美の祭典」**（オリンピア第二部）オリンピックの公式記録映画の走りとなった名作。監督：レニ・リーフェンシュタール。

45.　**「前畑ガンバレ！～ベルリン・オリンピックの光と影～」**〔2000年９月６日『その時歴史は動いた』NHK・45分〕

46.　**「手さぐりの資本主義～ドイツ・通貨統合の一ヵ月～」**〔1990年８月19日・NHK・60分〕７月１日東独の企業から３つの文字が消滅した。VEB（Volkseigener Betrieb）－『人民所有企業』がそれである。イエナに本社を置くカール・ツァイス・イエナ(Carl Zeiss Jena）も新しい通貨統合後はVEBから有限会社（GmbH：Gesellschaft mit beschränkter Haftung）として生まれ変わる。それと同時に自由主義経済の競争原理の導入で、余剰人員の整理・売れる商品の開発の為の投資・市場開拓などさまざまな問題を抱えている。全従業員６万人のうち３万人が所属する競争力のない部門を切

り離し、レンズ・測量機器など収益性の高い部門に残る3万人のうち20%（6000人）を合理化の対象としている。番組では新しい経済システムの中で生き残りを図る有名企業のスタッフと労働者たちのとまどいと苦悩を報告しながら、時代の変化を乗り切る人、乗り切れない人、いわゆる勝ち組・負け組の明暗が分れていく状況が現在進行形で語られていく。社会主義時代のスローガン『ノルマを達成しよう！』は今や自由主義経済のスローガン『コスト意識を持とう！』に切り替わった。また、戦後米軍占領地域に移転したカール・ツァイス〔在バイエルン州のオーバーコッヘン）社と分断されていた会社も統合されていく。あるいは西のツアィスが東のツァイスを吸収合併していく日も近い。

1990年〔平成2年〕10月3日・午前0時　ドイツ再統一

47・**「ドイツ統一式典の衛星生中継」**〔1990年10月3日・BS1・60分〕ZDF（ドイツ第2チャンネル）の特別番組の衛星LIVE中継番組。ベルリンの旧帝国議会議事堂前にスタジオを特設しての生中継で、コール首相のインタビューや、アレクサンダー広場の音楽コンサートの模様が放映された。統一の式典は、ドイツの周辺諸国を配慮し「民族主義的・国家主義的」色彩をできるだけ出さない形で行われた。

48.**「ニュースステーション・ドイツ統一関連ニュース」**〔1990年10月3日・NT21<テレビ朝日系列>30分〕1990年3月まで東独の首相を努めていたハンス・モドロー氏がテレビ朝日のスタジオに来て、久米宏のインタビューに応じる。番組では、東独最後の首相となったデ・メジエール首相の最後のテレビ会見の模様が紹介される。デ・メジエール氏のメッセージはおよそ以下のようなものとなった。「…これでドイツの統一が完了したわけではありません。本当の統

一は国民全員の課題として残されています。それは物質的な問題ではなく、お互いを理解することにあるのです。統一は与えられるものではなく、求めるものなのです。自由と統一に栄光あれ！」番組ではその他に、東独最後の第９コンサート／10月３日午前０時、統一の瞬間のベルリンの様子／統一式典におけるヴァイツゼッカー大統領の演説の模様などが紹介される。

49. **「東ドイツ最後の第九コンサート」**〔1990年10月13日・BS２・90分〕10月３日午前０時のドイツ統一を目前に控えた２日、ベルリン・シャウシュピールハウス（東ベルリン）で開催された歴史的なコンサートの中継録画。会場にはヴァイツゼッカー西ドイツ大統領をはじめ東西両ドイツ首相、国会議員などが聴衆として来場した。演奏曲目：「交響曲第９番ニ短調作品125『合唱つき』」（ベートーベン）演奏：ライプチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団。合唱：ベルリン放送合唱団。ライプチヒ放送合唱団。ライプチヒ・ゲヴァントハウス児童合唱団。ベルリン聖ヘトヴィヒ教会合唱団。指揮：クルト・マズーア。◆指揮者のクルト・マズーア氏は、壁崩壊への一つの原動力となったライプチヒのニコライ教会が主導した静かな民主化デモにも大きく協力を示した人物として高く評価されている。

50. **「ザ・ウォール・ベルリン90」**〔1990年12月３日・JSB（日本衛星放送）製作：３SAT/ZDF・1990年・90分〕1990年７月13日、壁の崩壊後ブランデンブルク門近くのポツダム広場に巨大な特設ステージが作られ、崩壊を記念する一大ロック・オペラ・コンサートが開催された。企画に参加したのは元ピンク・フロイドのロジャー・ウォータース。出演者は、スコーピオンズ、ウテ・レンパーなど。コンサートの最後でステージに再現された壁の巨大なセットが崩されていく大スペクタクルは一見の価値がある。コンサート開始前には東ベルリン市長ティノ・シュヴィチナ、西ベルリン市長ヴァルター・モンパーが舞台挨拶に立った。

1991年〔平成3年〕

51.「ブレヒト～懐疑する弁証家①そんなに、うっとり見つめるな②まず食わせろ、道徳はその次だ③靴の数ほど国を変えて④いっそ政権が国民を選べ」〔1991年1月28～31日・『20世紀の群像』・ETV・各30分　講師：岩淵達治〕ベルトルト・ブレヒト（Bertolt Brecht 1898－1956）は今世紀の演劇を根底から変革した人と言われている。ドイツ統一という現在の状況を背景にしながらもう一度ブレヒトの生涯と作品の意味を振り返る。ブレヒトは創作メモの中に「ドイツはいつかは統一されるだろう。でもそれは戦争によるものではないだろう」という言葉を残している。ブレヒトがこの世を去ったのは、ベルリンの壁構築の5年前のことである。

52－54.「ベルリン美術館～もう一つのドイツ統一～第1部：悲劇はヒトラーから始まった。第2部：別離の芸術がよみがえる第3部：美術館島に失われた文明が帰ってくる」〔1991年2月17～19日・NHK・各50分〕第2次大戦後東西に分断されたベルリン美術館が、いま統一を目指している。そのプロセスと多数の所蔵品を3夜連続で紹介する番組。

第1部：悲劇はヒトラーから始まった〔2月17日〕ベルリン美術館は第2次大戦前まで、ルーブル、エルミタージュ、メトロポリタンとともに世界4大美術館の一つに数えられていた。しかしヒトラーによって、印象派や表現主義の作品は「頽廃芸術」として美術館から撤去された。ひろしま美術館にあるゴッホの「ドービニーの庭」を例にとり「頽廃芸術」の売買に携わった画商たちの証言を織りまぜて、ベルリン美術館の栄光を担った作品がどんな運命をたどってきたのかを探る。

第2部：別離の芸術がいま壁を越える〔2月18日〕1945年のベルリン陥落により美術館は大破。疎開できなかった大型彫刻や大型建

築物は破損した。また疎開した作品は各地の占領軍の管轄となり、分散して保管されることになる。こうしてベルリン美術館は東西に分割されてしまう。しかし昨年初めての統一展が開かれた。第２部では統一を目指すベルリン美術館の現在の姿を紹介する。

第３部：美術館島に失われた文明が帰ってくる〔２月19日〕ボッティチェルリの「未完成素描集：ダンテの神曲」は、東西の美術館にばらばらに所蔵されている。これを初めてテレビカメラで撮影し、テレビ画面で統一を実現する。また東ベルリン美術館を訪ねたベルリン・フィルのチェリストたちによる演奏などを通して、芸術や文明が戦争という悲劇を越えて再会し融合する感動を伝える。

55. **「ケストナー～ナチズムへの抵抗①子どもの心を忘れるな②風刺詩から児童文学へ③弾圧下のユーモア④精神の復興を目指す」**〔1991年２月25～28日・ETV・各30分　講師：鳥越　信〕

56. **「世界陶芸紀行～憧れの結晶・磁器～」**〔1991年４月１日・ETV・45分〕番組は、フリードリヒ１世の創建になるベルリンの「シャルロッテンブルク宮殿（Schloss Charlottenburg）」の「磁器の間」の映像から始まる。磁器は17～18世紀のヨーロッパでは作れないものであり、中国や日本からの高価な輸入品として珍重されたものであった。磁器を自分の手で作ることは何百年にも渡りヨーロッパ人の夢であった。しかしながら中国の磁器山地・景徳鎮の郊外のカオリン〔高い嶺〕山から出土するカオリン（珪酸アルミニウムを含んだ白い土）がなければ白い磁器は作れなかったのである。そうしたヨーロッパ人の夢を実現したのが錬金術師ヨハン・フリードリヒ・ベトガーである。彼はザクセン王にマイセンのアルブレヒト城に監禁されながら、18世紀初頭、ようやくカオリンを見つけ出しヨーロッパで最初の磁器が作られた。いわゆる「マイセン焼（Meißener Porzellan）」がそれである。王は秘密が漏れるのを恐れベトガーを

監禁し続け、彼は絶望の中酒に溺れながら37歳で死んだ。

57. 「ゴー・トラビ・ゴー」(„Go, Trabi, Go“　1990年・東独）制作：ギュンター・ロールバッハ、監督／脚本：ペーター・ティム、脚本：ラインハルト・クロース。ライプチヒ郊外でつつましく暮らすシュトゥルーツ一家は、ある日「長期休暇」を取ることを決意。それは資本主義国家の産物として東独時代は考えられないものだった。一家は愛車トラビ（トラバント）で、いざイタリアへと旅立つ。しかしこの車は、物資不足の状況下で作られたダンボールとプラスチック製、しかもエンジンは2気筒。壁崩壊後、資本主義のシステムに翻弄される一家の姿をドタバタ風に描きながら、社会風刺を盛り込んだ異色のコメディー。バイエルンに住む親族と再会するが、まるで外国人扱いされるあたりは苦い印象を残す。〔96分〕

58. 「第2次大戦への10年③ヒトラーとムソリーニ」〔1991年4月12日・ETV・制作：ZDF　西独1986年〕冒頭の映像資料は、1930年代のベルリンを紹介。第1次大戦後、経済的に復興するベルリンの様子は、ワイマール共和国の最盛期の束の間の平和であり、その平和は1929年の世界恐慌により奪い去られてしまう。銀行は閉鎖されドイツ経済は破滅への道をたどり始める。インフレと失業率は高まり、国の経済は失業者の救済で破綻し、右翼（ナチス）と左翼（共産主義）が対立するそのはざまで脆弱な民主主義の基盤は揺らぎ始める。ヒトラーは強大なドイツ、栄光あるドイツをアピールし、民衆はその言葉に酔い、彼を首相に選んだ。ヒトラーは国内的混乱の元凶としてユダヤ人と民主主義者を攻撃対象にし、強いドイツを取り戻すために再軍備に着手。ドイツの民主主義は姿を消していく。1937年スペイン内線でヒトラーとムソリーニは始めて手を組むことになる。スペインは国王の亡命後共和国となり、市民の生活向上への期待は膨らむが共和国政府は、極左勢力の封じ込めに失敗したあと、守旧派のフランコ将軍は軍をまきこんでクーデターを計画。将軍に対し

ヒトラーとムソリーニは軍事的に加担することになる。スペイン内乱はドイツの最新兵器の実験場ともなり、組織的空爆は、スペイン北部の町ゲルニカを壊滅させた。フランコの独裁政権は、1975年の死に至るまで続いた。

59. **「冬の旅（Winterreise）～ベルリン物語～」**〔1991年4月27日・NHK・100分、制作：NHK／SFB（ベルリン自由放送）〕シューベルトの歌曲「冬の旅」をテーマに日本とドイツが戦後たどってきた道を父と子の心を通して描く。東西ドイツの壁の崩壊を契機にめぐり会う二人。父は、日本の高度経済成長を支えてきた大商社の駐在員で現在は顧問である父と、ドイツ女性との間に生まれた息子との心情を描くことによって、時代と人間の関わりを考えるドラマ。ベルリンの壁が崩壊した後、ライプチヒの電子工学技師ハンスは、初めて西ベルリンの叔母に会いに行った。病身の叔母と体面したハンスは、日本の父の会社へ手紙を書いたと話す。彼はドイツ敗戦の間際に日本の商社員加藤とエルザとの間に生まれ、敗戦によって引き裂かれた父とは会ったこともない混血児だった。手紙を受け取った加藤は衝撃を受け、持病の心臓発作で倒れる。ハンスが日本人の父親に会って確かめたいことはただ一つ－自分は愛されて生まれた子供なのかどうか。

60. **「心はひとつになりましたか～統一ドイツ180日～」**〔1991年5月26日『小朝の地球時代』TNN＜日本テレビ系列＞・30分〕ドイツ統一の結果、東西に分断されていた家族・友人・知人は「自由」に行き来できるようになった。1年前にこの番組で取材した旧東独メルゼブルクに住むクリステル・プラフナーさんが再び番組に登場し、統一後の一年間、一市民の目に映った変化の様子を取材する。街で目立つのは西の車、消費生活の変化も著しい。スーパーの空のショーケースにも商品が戻ってきた。彼女は西に住んでいる子供たちにいつでも会えるので統一して良かったと思っている。そうした一方

で自由経済の競争原理の導入で踏みとどまれなかった多くの国営企業が閉鎖、失業者も必然的に増加している。番組の後半で注目すべきは、社会主義国の優等生であったはずの東独の企業が引き起こした「公害・大気汚染・環境破壊」の実態である。有名な石油化学コンビナートでは、工場排水の垂れ流しや有害な廃棄物の放置がすさまじく、統一前東独では公害が存在しないと公言していた政府の大きな嘘が明らかとなった。統一後、東独の各地に作られた「環境自然保護局」の役割は大きいが、活動は始まったばかりである。西の環境基準に達しない企業が廃止されると、さらに失業者も増加していくことになる。

61. **「日本・ドイツの外国人労働者～国際シンポジウムから～」**〔1991年6月1日・ETV『土曜フォーラム』・75分〕5月20日、東京ドイツ文化会館で日独各界の識者が集まって外国人労働者問題の国際シンポジウムが開催された。2日間にわたり政府、企業、労働組合、市民の立場から様々な情報交換や活発な議論が展開された。ドイツでは1950年代から経済復興を支えたのは「外国人労働者」の存在である。日本でも80年代後半から外国人の不法就業者が急増している。その理由としては日本経済内部における外国人労働者への需要の増加と若年労働者の3K労働への敬遠が挙げられる。番組ではその社会的、政治的、文化的影響と問題は何なのかを探る。立場としては、積極的開国論、条件つき受入れ論そして日本社会では異質なものを受け入れる素地が整っていないので性急に受け入れるべきではないの3つがある。しかしこうした立場の開示とその間の議論が空虚と思えるほど、現実的には動きが進展しているが、今後模索される取り組みはさしあたり4つ考えられる。①人材作り支援としての秩序ある導入②近隣諸国の経済発展のための技術的な援助③国内の就業構造の改革④日本人の心の開放－外国人と共に働き共に生きる形が常態化していくための日常的な皮膚感覚の育成・異文化教育の重視

など。

62. **「ゴダールの新ドイツ零年」**（Allemagne Année 90 Neuf Zero, 1991年・仏）監督：ジャン＝リュック・ゴダール　出演：エディ・コンスタンティーヌ、ハンス・ウィシュラー、クラウディア・ミチェルゼン。冷戦の終結は、東西の対立を前提に自己のアイデンティティを確立してきた人々に混乱をもたらした。ゴダール監督は、フィクションとドキュメンタリー、さらに映画作品からの引用などを交錯させながら歴史を検証し、時代のうねりに翻弄される人々の心の空白を浮き彫りにするという形で90年代ゴダール映画の幕開けを高らかに宣言した内省的かつ孤独な映像詩。ベルリンの壁が崩壊した直後の旧東ドイツを彷徨しつつ「西」に向かう主人公の旅は、彼が自分自身を再発見する旅なのだ。なおゴダール監督の旧作「アルファヴィル」に続いて主人公レミー・コーションを演じたコンスタンティーヌは93年に死去。本作が遺作となる。当初は、58分の作品だったが、ベネチア映画祭に出品する際、出品規定（60分以上）に合わせるために4分が追加され、現在の形になった。91年のベネチア映画祭においてイタリア上院議員長・金メダルを受賞。ベルリンの壁が崩壊した直後のドイツ、軍情報部のゼルテン伯爵は、旧東独に潜入したまま行方不明になっていた諜報員のレミーを捜していた。まもなくゼルテンは小さな町の美容室にいたレミーを発見。彼に西側に帰るように勧め、自分はラジオの翻訳の仕事を始める。一方レミーはワイマール広大な収容所跡地（ブーヘンバルト）で知り合った女性に連れられてワイマール周辺を散策したり、ドン・キホーテとサンチョ・パンサが巨大な機械に向かって突進していくのを目撃したりしながら西を目指す。レミーはドン・キホーテとサンチョに尋ねる－「西はどっちだね」〔64分〕

63. **「国をなくしたエリートたち～旧東独国家官僚の日々～」**〔1991年9月8日・NHK・60分〕　旧東独の社会主義政権を支えた高級

官僚は、そのほとんどが統一後に失業した。元在日東独大使館で一等書記官として勤務していた東独外務省日本課長のヘルマン・ヘーバー氏も例外ではない。彼は1981年のホーネカー議長の来日、昭和天皇との会見などを準備したこともある有能な外交官であった。だが、彼の再就職活動には、秘密警察との関わりが取り沙汰されるために思うような仕事につけないでいる。同僚の中には、全財産をはたいてポツダム広場の近くでソーセージとビールの屋台を開き、過去の栄光をかなぐり棄ててたくましく生き始めた人、愛知県安城市にある海苔メーカーの海外進出のためのスタッフとして就職を決めた人など、統一後の生き方はさまざまである。他方、東独で自殺者が急増していることなどを見ても、急激な社会変化に適応できないでいる人たちも多い。精神医学が「存在不安（Existenz-Angst）」と名づける症状に苦しみ精神科病院を訪れる人の大半は元教師・医師そして高級官僚などであると言う。ドイツ人悲願の民族統一がなされた後、予想をはるかに超えた心理的葛藤の克服が課題の一つとなっている。ヘーバーさんは番組の最後に次のように語る。「結局のところ私たち家族が苦難の道を歩んできたのは、国家に余りにも深く関わったからかも知れません。私は今問わざるを得ない。個人にとって国家とは何なのかー国家を支えるということは私にとって何だったのかーと。おそらく私に出せる答えは、これからの人生で国家との関わりのない生き方を選ぶーということかも知れない」◆ファシズムから社会主義国家建設へ、そして社会主義から資本主義へ。東独はこの半世紀、二度にわたる大きな社会変革を遂げる。国家体制が変わるたびに古い正義は否定され、価値観がくつがえされ、時には国家への忠誠がその後の裁きで犯罪となることもしばしばであった。一つの国が消えて新しい国が生まれ、ダイナミックな歴史のうねりは個人の運命をも巻き込んでいく。消え去るものへの愛着（ノスタルジー）を抑制した良質のドキュメンタリー番組となって

いる。

64.「レイルウエーストーリー・オーストリアの鉄道～アルプスとドナウに沿って～」〔1991年9月16日・JSB（日本衛星放送）・60分〕オーストリアはヨーロッパ中部に位置する内陸の山国で、古来多くの民族がドナウ川に沿って移動した。この国の鉄道はそうした歴史を踏まえドナウ川とそして山岳部の都市をつなぐ形で発達してきた。西はアルプスを抜けてスイスから、南はブレンナー峠を抜けてイタリアから、北はイン川に沿ってドイツからと、鉄道はヨーロッパの十字路インスブルック（Innsbruck）に集まる。オーストリア国鉄は、総延長5641㎞、電化区間は3238㎞であるが、番組では、山国独特の工夫をこらした山岳鉄道などがいくつか紹介されて、オーストリア国民の鉄道文化に対するこだわりの一端が紹介される。

65.「4000枚の絵～ユダヤ人収容所・子供たちの記録～」〔1991年9月20日・ETV・45分〕チエコ共和国の首都プラハにはかつてヨーロッパでも最大のユダヤ人街があった。現在ここにあるユダヤ人博物館には4000枚の絵が保存されている。テレジン収容所で子供たちが残した絵である。チエコにあるテレジン収容所は、絶滅収容所に至る中継収容所として、当時5～15歳の1万5千人のユダヤ人の子供たちが送り込まれた。飢えと寒さ、死の恐怖の中で子供たちは家に帰れる日を夢見ながら空想の世界を描いた。子供たちは絵を描くことで癒され、生きる希望を再び奮い立たせた。しかしながらほとんどの子供たちは家に帰ることなく、アウシュヴィッツに送られていく。15000人の子供のうち生還者は100人にすぎない。テレジン収容所のもう一つの目的は、ナチスのプロパガンダ映画に利用することであった。ユダヤ人迫害に疑念を抱いた国際赤十字社の視察にも耐えうる「演出」の舞台ともなった。プロパガンダ映画の題名は『ヒトラー総統はユダヤ人に町を与えた』製作の指揮にあたったのは、ヒトラーの側近アドルフ・ボルマンであった。食べ物を十分与えら

れて遊園地で遊ぶ演技をさせられた子供たちは撮影後ほどなくして全員アウシュヴィッツに送られた。最近の調査で、ここで子供たちに密かに絵を教え続けた一人の女性画家の存在が明らかとなっている。関連映像資料⇨**「ゲットーの絵画教室～フリードル先生と子供たち」**〔1998年8月14日・45分〕

66. **「引き裂かれる恋人たち・ベルリン～愛を隔てる壁～」**〔1991年10月28日・NHK・45分、制作：シネコンタクト・プロダクション／英・1991年〕若い二人の人生を大きく狂わせてきた壁の存在。東ドイツを出る3つの方法：①いつ許可が下りるか分からない公式の出国申請書を出すこと。②生命の危険を冒して壁を乗り越えること。③結婚申請書を出すこと－これは人道的な理由で出国可能となる。父を医者に持つゼバスチャン・ゴダーは東ドイツでは特権的な中産階級の家庭に育った、俳優を志す彼はいつか自分の国を出たいと思っていた。そんな彼にできる選択肢は上に挙げた3つしかなかった。そんな時に彼は、西ドイツのブレーメンからやって来たアンネ・カトリン・クリンガーと東ベルリンで行われる東西合同演劇祭で運命的な出会いをする。恋に落ちた彼女は、彼の出国を助けたいと願った。だが、彼女は東の市民となることにためらいがあり、仕方なく二人は壁を隔てて時が来るのを待つことになり、絶望と不安と焦燥の日々が続く。一般の西ドイツ国民は朝の7時から夜の12時までしか東ベルリンに滞在することができなかった。ブレーメンから通うのは大変だったので、彼女は西ベルリンに移り住む。西ベルリン市民ならば、東ベルリンに一晩中滞在することができたからである。辛いデートを重ねるうちに二人は、このドキュメンタリー番組の制作に協力することにした。東での撮影は隠し撮りで行われることになったがかなりの危険が伴った。彼女が東で感じたのは、人々が友情や支え合いを大切にするということであった。だが社会保障がしっかりしている分だけ自分の将来が見通せてしまうことの無力感は

避けられなかった。さらに密告や受刑者のような監視の苦痛が伴った。結婚申請は2年半も待たされ続ける中、1989年の春二人は結婚式を挙げるが、出国の許可は依然として下りなかった。ほどなく彼は境界線を越えることになる。彼は二度と東に戻るまいと決意する。両親を置いて国を出ることに後悔はなかった。そしてその半年後にベルリンの壁は崩壊した。

67. **「陰謀～ナチスに挑んだ男～」**〔テレビドラマ・米、原作：ウィリアム・L・シャイラー。1991年12月25～28日・NHK・4回シリーズ各90分〕ナチズムの嵐が吹き荒れ始めた1930年代のドイツ。アメリカ人ジャーナリストのウィリアム・シャイラー（『第三帝国の興亡』の著者）は、ナチスドイツを取材するために妻テスとともにベルリンを訪れた。だが、彼が最初に目にしたのは家畜用の貨車に乗せられ運ばれていくユダヤ人僧侶の姿だった。街頭では、学生たちが本を焼く姿も見られ、ナチスによる厳しい思想統制も行われていた。国内の情報はすべて政府が管理し、啓蒙宣伝大臣ゲッベルスの目が至る所に光っていた。シャイラーは、ナチスの党大会の会場となるニュルンベルクのスタジアムで記録映画撮影の準備に余念のない一人の女性映画監督と出会う。彼女はレニ・リーフェンシュタールであった。やがてナチスの本質と彼らの恐るべき野望に気づいたシャイラーは、ゲッベルスやゲシュタポの魔手が迫り来る中、真実を報道するために不屈のジャーナリスト魂をもって、ナチスに対して命がけの闘いを挑んでいく。

68. **「レニ・リーフェンシュタール・インタビュー」**〔1991年12月20日・BSN＜TBS系列＞『ニュース23』約20分〕1902年ベルリンに生まれたリーフェンシュタールは、ナチス党大会のドキュメンタリー映画『意志の勝利』で脚光を浴び、続く1936年のベルリン・オリンピックのドキュメンタリー映画『オリンピア二部作～民族の祭典・美の祭典』で一躍世界的な名声を得た。女史は東京・渋谷文化村

で開催中の『リーフェンシュタール展』に合わせて来日し、キャスターの筑紫哲也氏とのインタビューに率直に応じ、自分自身の半生とナチズムとの関わりを素直に語った。以下ではインタビューの一部を抜粋する。「私がこの映画（意志の勝利）を1934年に製作したことに注意してください。ヒトラーが600万人の失業者問題を片づけることに成功した頃、ドイツ人も世界の人もヒトラーに熱狂し支持していました。なぜこの中の一人が彼のために働いたと批判されるのでしょう。この時はアメリカやフランスでもニュース番組が製作されました。私は党大会を撮影しただけ一人の人間ではないのです。私は人種差別主義者ではなく、絶対ナチスではなかったのです。「オリンピア」ではオーエンス（アメリカ代表の黒人選手）やアフリカ人を撮っています。人種差別主義者なら決して撮らなかったでしょう。〔・・・〕私がヒトラーの要請でいくつかの映画を撮ったために、これらは宣伝映画とされ、私は何年も刑務所に入れられました。映画監督としての存在もほとんど破滅させられました。そのために何十年もの間非常に苦しい思いをしたのです。ヒトラーと知り合ったことは私には非常に不幸なことでした。」⇨関連映像資料：69、70

69. 「リーフェンシュタールの世界～20世紀を走り抜ける映像のミューズ～」〔『映画の先駆者シリーズ）1985年（レーザーディスク）。

70. 「レニ」（原題：„Die Macht der Bilder: Leni Riefenstahl“）1993年　ドイツ＝ベルギー合作。脚本／監督：レイ・ミュラー、182分）監督のレイ・ミュラーとリーフェンシュタールとのインタビューを中心に構成さた長編ドキュメンタリー映画。

1992年（平成3年）

71. 「ビム・ベンダース・イン・東京～夢の果てまでもより～」〔1992

年２月２日・BS２・60分〕ドイツの映画監督ビム・ベンダースの次回作『夢の涯までも』が1991年東京国際映画祭で特別上映され話題を呼んだ。この映画は未来社会を舞台に、世界各地の映像情報を収録している科学者トレバーと運命的な恋に落ちた女性クレアとの逃避行を描いた叙事詩的作品。実際に17ヵ国でロケを行い、日本のNHKが開発したハイビジョンも使われている。出演はウィリアム・ハートとソルベイグ・マルタン。日本からも笠智衆と三宅邦子が参加。東京でのロケとNHKでのスタジオ作業の模様を追いながらその創作の秘密に迫る。

72. **「夢の果てまでも」**（'Till the End of the World'）1991年・日＝米＝独＝仏＝豪合作）監督／原案／脚本：ビム・ベンダース。世界各国をロケし、NHKの協力で先端ハイビジョンを駆使するなど話題をまいたが、以前からのヴェンダーズのファンの反応はかなり冷淡なものがあった。1999年に滅亡の危機に瀕した世界を舞台に謎の旅を続けるトレバーが世界各地で集めた映像を、盲目の母親の脳の中に送り込む実験を始めるが…。〔158分〕

73. **「私は自国民を撃った～ベルリン・壁が崩れた後で～」**〔1992年４月15日・NHK・60分／制作：英・ヨークシャーテレビ〕ベルリンの壁を乗り越えて西側へ脱出を試みようとした自国民を容赦なく射殺した旧東独国境警備兵が、今相次いで裁きを受けている。共産党体制下の「権力犯罪」の責任が末端の個人にまで及ぶのかどうかが裁判の最大の争点となっている。元国境警備兵はなぜ、どんな状況で同じ国民を殺さなければならなかったのか。元国境警備兵二人が初めて公に証言した番組である。裁判は1992年の１、２月に相次いで有罪の判決が言い渡されている。ベルリンの壁1961年の構築以来89年11月までに約200人が逃亡を試み79人が射殺された。◆番組では壁の崩壊後、モスクワに逃亡したホーネッカー元東国議長も登場、「だれも（旧東独時代を）裁く権利はない」と意気軒昂なと

ころを見せている。壁が崩壊、両国は統一して新たなスタートを切ったが、皮肉にも旧東独の市民の間で新たな悲劇が始まったことを如実に示す番組となっている。本原稿執筆時の2000年夏、新聞は次のような小さな報道を伝えている。『新潟日報』2000年8月23日・朝刊より引用－「最後の射殺事件で元指揮官に実刑・ベルリン地裁【ベルリン21日共同】ベルリン地方裁判所は21日、1989年2月にベルリンの壁を乗り越えようとして射殺された青年＝当時(20)＝ら計4人の射殺命令を下したとして殺人罪で起訴された旧東ドイツ国境警備隊の元指揮官(52)に禁固2年3月（求刑禁固2年6月）の実刑判決を言い渡した。ベルリンの壁は1989年11月に崩壊し、青年は壁で射殺された最後の犠牲者となった。元指揮官は射殺命令に関する責任を認めており、控訴しない方針。」

74. **「Uボート234号最後の航海」**〔1992年5月6日・NHK『現代史スクープドキュメント』45分〕ドイツ潜水艦（Unterseeboot）－Uボートは、第2次大戦中「灰色の狼」ともよばれ、ドイツ海軍の主力で、その攻撃力は大西洋上の連合軍にとって最大の脅威であった。第2次世界大戦末期1945年5月大西洋を航行する一隻のUボートが突如航路を変えてアメリカに向かった。U234号は5月19日、アメリカの駆逐艦に伴われてポーツマスに入港した。ドイツ本国の降伏を知り自ら投降したのである。アメリカ海軍情報局は乗組員と搭載された積み荷に関して綿密な調査を行った。調査記録は軍事機密とされ、以後半世紀にわたりアメリカ公文書館に眠り続けてきた。情報局が異例の関心を示したU234号の目的地は東京であった。

75. **「ベルリン大探検」**〔1992年6月6日・BS2・360分〕ベルリンのクーダム（ブライトシャイド広場）に特設スタジオを作り、統一から2年経過したベルリンの近況を報告する。かつて新潟大学人文学部の外国人教師を勤めておられたベアーテ・フォン・デア・オステン（Beate von der Osten）氏もレポーターとして登場する。

76―79.「悠久のヨーロッパ・エルベ川紀行～歴史と音楽が聞こえる街～」〔1992年６月８～12日・BS２・各60分〕

①エルベを描いた二人の画家〔６月８日〕画家の安野光雅が、ドイツ絵画史に登場する二人の画家、ダーフィド・C・フリードリヒ（ドイツロマン派）とエーミール・ノルデ（ドイツ表現派）のゆかりの地を訪ねる。訪れる町はハンブルク（Hamburg)、シュヴェリン（Schwerin)、フレンスブルク（Flensburg)、グライフスヴァルト（Greifswald)。

②ドイツ音楽のふるさとを訪ねて〔６月９日〕マグデブルク（Magdeburg)、ハレ（Halle)、アイゼナッハ（Eisenach)、ライプチヒ（Leipzig）などザクセンやテューリンゲン地方の諸都市を訪ね、バッハ、ハイドン、パッヘルベル、テレマンなどの音楽家の足跡をたどる。

③古典とモダンの出会いを求めて〔６月10日〕エルベ川をさか上る旅の３回目は、ベルリンの南西に位置するコスビックの町から始まる。この地域はブランデンブルク州の中で自然保護地域に指定され、エルベ・ビーバーの生息地にもなっている。100年ほど前に北アメリカから持ち帰られたビーバーがエルベの上流で放し飼いにされたものがやがてこの地域に住み着いたと言われている。コスビックと対岸のベルリッツとの間には、川の流れを利用したエンジンのないフェリー・ボートが活躍している。旅の案内人安野氏は、このあとデッサウ（Dessau）に至る。エルベ川に沿って広がるデッサウは、建築・デザインの分野で今や神話的存在となっている造形教育の学校「バウハウス（Bauhaus)」が1925年から1932年までの７年間にわたり運営された町である。創始者ヴァルター・グロピウス（Walter　Gropius）によって設計された校舎建築は、当時の活動を象徴するものとして今も残り、ユネスコの世界遺産にも登録されている。工業生産と芸術の調和という

バウハウスの理念は、装飾を一切排除した機能追求の方向をとることになり、今日の大量生産・大量消費社会を準備したとも言える。この後安野氏は、マルティン・ルター（1483－1546）の宗教改革（1517年）の町ヴィッテンベルク（Wittenberg）、マイセン磁器で有名なマイセン（Meißen）などの町を訪ねる。

④**ドレスデンとライプチヒ**〔6月11日〕近代的なビルが立ち並ぶ町ライプチヒは中世以来繁栄を誇ってきたドイツの出版文化でも名高い商業都市である。1989年11月のベルリンの壁崩壊に至る東独市民の民主化デモを指導したのはライプチヒにあるニコライ教会であったことも忘れてはならないだろう。その好対照をなすバロック建築の都市ドレスデン（Dresden）は、華やかな歴史を誇るザクセン王家の都である。一日に300本の列車が行き来するライプチヒ中央駅は30本のホームがあり、ヨーロッパでも最大級の駅である。ドイツ国内だけではなくパリ、アムステルダム、ウィーンなどヨーロッパ各国とライプチヒは結ばれている。バイオリニストの千住真理子は安野氏とともに、ドイツ文化の中心地とも言えるザクセンの2つの都市を訪ねる。150年の歴史を持つメンデルスゾーン音楽院（かつてのライプチヒ王立音楽学院）には、かつて国費留学生として滝連太郎が留学した。今も残されている学籍簿によれば滝は1901年の10月に入学、翌年には病気のため退学と記録されている。彼はやがて日本に戻り24歳の短い生涯を閉じる。主な紹介場所：トーマス教会／新ゲバントハウス・コンサートホール。ゲバントハウスは、1743年に市民の手によって創設された世界最古の交響楽団／造形美術館。また、人口51万人のドレスデンは、統一後ザクセン州の州都となり、歴史的建造物の修復も進み、かつての栄光を取り戻そうとしている。

⑤**プラハからエルベ源流へ**〔6月12日〕番組では、ドイツ国境を越えてさらにチェコへと入りエルベ川をさかのぼっていく歴史・文

化探訪の取材が続く。

80—83.「体験レポーター・ドイツ・カントリーロードを行く」〔1992年6月8～11日・BS2・各40分〕かつて人生の一時期にドイツの社会・文化あるいはドイツ人とかかわりのあった日本人が、それぞれに思い出の町や村を訪ねる視聴者参加型のドイツ紀行番組。①バロック街道・春の歌～ビベラッハ②斜塔のある町～デルブリュック③大地のりんごジャガイモ料理味比べ～ノインブルク④アルプスのヨーデル。

84.「ドイツ横断・SLの旅」〔1992年6月8日・BS2・60分〕ドイツ・ヘッセン州の都市カールス・ルーエ近郊のエトリンゲンとバートヘレンアルプを結ぶ19㎞の鉄道では、毎週日曜日にSLが走る。これはドイツ各地にある鉄道ファンクラブの一つ1500人の会員を有するUEF〔ウルム鉄道友の会〕が動かしている。こうした友の会は全国にあり、貴重なSLを保有して定期的に動かしている。実際にSLを動かすときには、元国鉄でSLの機関士をしていたユルゲン・レーグラー氏〔56歳〕が技術顧問となって、若い機関士を育成しながらSL人生を楽しんでいる。ドイツで最初の鉄道が走ったのは1885年。国鉄は赤字路線を廃止する動きが出た中、地方の鉄道友の会が買い受けた事例もある。国鉄は民営化されたものの、こうした友の会を始め、多くの鉄道ファンによってドイツの鉄道文化が支えられている。ドイツ人は鉄道も文化の一部であると考えており、経済効率重視で、赤字路線を切り捨ててきた日本の国鉄とは哲学が異なっているということが、番組でよく理解できる。番組後半では、東西国家分裂とともに分断された国境で途切れていた鉄道が再びつながる時を紹介する。◆統一前までは、ドイツ国鉄の旧称：ドイツ帝国鉄道（Deutsche Reichsbahn）を東独が引き継いでいたのは不思議である。統一後東西の鉄道線路の接続工事は、まず国境線上に敷設されていた「地雷」の撤去作業から始まった。

85. 「ヴェルニゲローデ合唱団演奏会」〔1992年9月6日・ETV『芸術劇場』・70分〕1951年、東ドイツ・ヴェルニゲローデ（Wernigerode）市のゲルハルト・ハウプトマン高等学校の合唱団として結成されたヴェルニゲローデ合唱団。この合唱団が最も得意とするレパートリーは「ドイツ民謡（Deutsche Volkslieder）」の世界で、民謡特有の素朴な音楽を芸術の領域まで高めている。ヴェルニゲローデは、ドイツ・テユーリンゲン州のハルツ山地にある中世都市。統一後、旅行の自由を獲得した旧東独の子供たちが、演奏会の移動中に見せる素朴な表情が初々しい。

86. 「モニカとヨーナス～旧東独・暴かれた密告社会～」〔1992年10月12日・NHK・45分〕ドイツが統一して2年。しかし、統一ドイツは旧東独経済の再建に手間取り、最近は外国人排斥運動も頻発、何かと世界から注目されている。旧東独といえば、国家を維持するために必要だったとされているのがベルリンの壁と並ぶ「秘密警察（シュタージ）」。番組では統一前、東独社会の隅々にまで張りめぐらされていた秘密警察に協力した密告者と被密告者の葛藤を描く。モニカ・ヘーガーさんは10年前、平和運動家のウルリケ・ポッペさんに同志として近づき当時3歳だった長男のヨーナス君の母親代わりまでしていた。言論の自由、軍拡反対を唱えるポッペ夫妻には500人もの密告者がいたが、モニカさんは唯一ポッペさんの家庭にまで入り込めた密告者。ポッペさんの友人、同僚、家族との会話の内容、就寝時間、そしてコーヒーに入れる砂糖の数までをも秘密警察に報告していた。モニカさんの人生が変わったのはこの1月。本人に限り密告文書が公開される制度がスタートしたからだ。新聞、テレビで「密告者」と実名報道されたモニカさんは外出すると「裏切り者」とののしられ、自宅でひっそりと暮らしている。ある日、2年ぶりに12歳になったヨーナス君を招き「なぜ秘密警察に協力するようになったか」を話す。秘密警察は15万人の密告者を1600万国民の暮ら

しの隅々に配置、400万人の個人情報を集めた。その中には牧師が信者を、先生が生徒の家族を、また夫が妻を、逆に妻が夫を監視していたケースもある。この50年でナチズムから社会主義、社会主義から資本主義へと、二度国家体制が変わった旧東ドイツ。体制が変わるたびにそのしわ寄せを受けるのはいつも国家を信じてきた人たちである。

87・**「問いかける焦土～湾岸戦争・ある映像作家の記録～」**〔1992年9月8日・NHK・45分／製作：Premiere プロダクション／ドイツ・1992年〕イラク軍のクウェート侵攻によって始まった湾岸戦争は、1991年2月27日、多国籍軍の勝利のうちに終結したが、その後には海への原油流出や放火された油井の炎上などによる深刻な環境汚染問題が生まれていた。イラクの隣国クウェートは1989年の国民生産（GNP）が一人当たり1万6380ドルと中東諸国に中では第2位で「石油に浮かぶ楽園」とも呼ばれる豊かな国であったが、1990年8月2日イラク軍はクウェートに侵攻、全土を武力制圧し一方的に併合したのであった。現代ドイツを代表する映画監督でニュー・ジャーマン・シネマの旗手といわれるヴェルナー・ヘルツォークは戦争直後のクウェートに入り、炎上する油井とその消化活動を克明にフィルムに収めた。番組の冒頭でヘルツォークは次のように語っている。「人類にとって重大なことが起きたのです。あの油井火災は人為的な大惨事であり、化学兵器や原爆と同種だと思えました。人類が記憶にとどめるために、暗く恐ろしい映像を残すべきだと私は考えました。それには最高の忍耐が必要です。私はこの作品をSF映画のようにしたいと重い、荒廃した我が惑星へのレクイエムを作ったのです。この作品では様式化が不可欠でした。さもないとだたのリポートです。私が作りたかったのは、私たちの暗い夢や幻想に関わる映像です。この作品は忘れ去られはしないと信じています。湾岸戦争の普通の情報はじきに忘れられるでしょう。人類の関心はユ

ーゴや南アフリカ情勢に移るかもしれません。しかし人の心の奥の悪夢や幻想に触れた作品は決して忘れられないのです。政治的なメッセージは避けようと思っていました。それはテレビで何度も繰り返され誰にも明らかです。戦争の犯罪的側面はすべての人が知っています。ここで私が意図したのは、未来の破局を回避するための、このSF的映像が人の心の奥に届き、記憶に長く残ることです。いつでも起こりうることを描きました。いわばダンテの『神曲』なのです」。クウェートでは1330の油井のうち732が破壊され、大量のすす、二酸化硫黄、二酸化炭素が排出された。100年以上燃えつづけると言われた史上最悪の油井火災には、戦争集結後すぐに米国・カナダなどの専門チームがクウェート入りし消火活動を開始した。炎上し失われた原油は、1日に250万バレルから550万バレルで、日本の消費量の約1.5年分がただ燃え尽きたとされている。

1993年（平成5年）

88. 「ザ・ラストUボート」〔1993年1月2日・NHK・75分〕脚本：クヌート・ベイザー、岩間芳樹木、演出：フランク・バイヤー、村上裕二。出演：小林薫、大橋吾郎、ウルリヒ・ミューエ。昭和20年、一隻のドイツ軍潜水艦が日本に向け出航した。帝国の崩壊を目前にしたドイツは、すべての軍事機密を日本に託すことを決定。二人の日本人将校が同乗したその艦には原子爆弾開発のためのウラン鉱石など膨大な資料と秘密兵器が積まれていた。歴史上の事実であるこの最後のUボートのエピソードを、ドイツ、アメリカ、オーストリア、日本の4ヵ国共同制作でテレビドラマ化。潜水艦という運命共同体の中で、国家理念と個人感情がぶつかり合う人間ドラマを壮大なスケールで描く。日本軍の将校・巽（小林）と木村（大橋）を乗せたUボートが出航し、ようやく敵の追撃を振り切った頃、艦

にドイツ降伏の知らせが届いた。艦内では降伏派、航海続行派、中立国への亡命派に別れて激しい討論が繰り返される中、艦長のゲルバー（ミューエ）が出した結論は降伏。これを受けて巽と木村は積み荷の海中投棄を要求する。◆演出のフランク・バイヤーは、旧東独時代のDEFA映画社で最も世界的に知られた監督である。主な作品は以下のとおりである。（89、90、91）

89. **「裸で狼の中に」**（„Nackt unter Wölfen“ 1962年）東独DEFA社。1945年の3月、連合軍はすでに西部国境を突破し、東部ではソ連軍が次第にベルリンに迫っていた。ワイマールの郊外にあるブーヘンワルト収容所には、その頃もまだ新たな囚人の一団が送り込まれていた。その一群の中でトランクの中に隠れていた一人の子どもも運ばれてきた。囚人たちは子どもの命を守るためにいろいろと工夫を重ね、やがてこの収容所は囚人たちにより独自の解放がなされる。

90. **「冤罪」**（„Der Aufenthalt“ 1983年）東独。監督：フランク・バイヤー。ドイツ敗戦後、ポーランドで捕虜となったドイツ兵士の主人公は、一人の市民の告発でいわれのない虐待行為により刑務所に収監され、監視するポーランド兵の憎しみの対象となりひどい扱いを受けながらも自らの無実を訴えつづけるが。

91. **「ニコライ教会」**（„Die Nikolai Kirche“ 1992年。）バイヤーは壁の崩壊のきっかけとなったライプチヒにおける決死の覚悟で行った東独市民の月曜デモを主催したニコライ教会や壁崩壊直前の東独市民の民主化運動をドキュメンタリースタイルで作ったTV作品。これはドイツで放映されたものをビデオで録画。

92. **「ベートーベンの世界～ピーター・ユスチノフが語る～」**〔1993年2月12／19日・ETV・各45分・制作：ZDF〕　イギリスの名優ピーター・ユスチノフは、数カ国語を話し、ドイツ語も堪能な教養のある俳優で、また古典音楽にも造詣が深い。ドイツのテレビ局

ZDFはうってつけの案内役を迎え、ボンからウィーンへとベートーベンの足跡を辿る良質の番組を作り上げた。

93.「シューベルトへのはるかな旅路～フィッシャー・ディースカウ」〔1993年3月20日・ETV・60分〕

94―95.「ニッポン・外国人労働者」〔1993年5月17／18日・ETV・各45分〕

1．**ドイツ人G・ヴァルラフの体験報告**：ドイツ人ジャーナリスト、ギュンター・ヴァルラフは8年前に西ドイツにおけるドルコ人労働者の実態を2年間にわたり隠しカメラで取材した。そのドキュメンタリー映画「最底辺（„Ganz Unten“）」はドイツ社会に大きな衝撃を与え、また労働条件改善の制度を充実させる起爆剤ともなった。今回ヴァルラフはイランから観光ビザで来日し、単純作業に従事するいわゆる不法就労者の実態を探ろうとする。目的は日本で外国人労働者（マイノリティ）の人権が守られているかどうかを取材することである。取材場所は、上野公園、新宿駅、代々木公園などで、麻薬の密売には、当然ながら日本のヤクザが関与している。不法就労のイラン人の抱える問題は、主として①賃金の未払い②予告なしの解雇③労働災害に十分な保障が与えられていないことなどが上げられる。ヴァルラフは、彼らの実態を取材した後で、日本国内のヤクザ組織という暗部の問題がイラン人にすりかえられており、日本はイラン人の存在を合法化すべきであると主張する。

2．**討論・日本は何をなすべきか**：シリーズの2回目は、1回目の取材を受けて、労働法に詳しい手塚和彰氏、アジアの経済事情に詳しい小野五郎氏が加わって3人で、日本の外国人労働者の問題について討論が行われる。ヴァルラフ氏は、西ドイツの外国人問題の取材には2年をかけたが、今回はわずか3週間という日程の取材で必ずしも十分に時間をかけて調査したとは言えないが、そ

れでもイラン人労働者の状況が予想以上に過酷であることに衝撃を受けたと述べる。フランスでは外国人の不法労働者問題の解決のために期日指定で労働ビザを発給する制作を行ったことを指摘、日本でも可能ではないかと提言する。◆討論は必ずしもかみ合わず、論点が絞りきれなかった点は残念であるが、ドイツに比べて日本における外国人労働者問題は始まったばかりであるから、国内で約30万人の外国人労働者が生きているという「事実」を前提として、事態が深刻にならないうちに有効な手を打つ行政の迅速性を訴える点では３者共通している。さらにこの問題は、「異文化理解や共生」といったきれいごとではすまされない深い問題を秘めていることを示唆していることはたしかである。

96. **「世界ビール紀行②ドイツ・チェコ」**〔1993年８月17日・ETV・45分、製作：オークスヘッド／英〕ドイツは国民一人当たりのビール消費量は世界一であるが、中でもバイエルン州が群を抜いている。案内役のビール研究家マイケル・ジャクソン氏（アメリカの歌手とは別人物）は、番組の中でドイツビールの特質についてたっぷりと蘊蓄を傾ける。ジャクソン氏はまずミュンヒェンのホーフブロイハウスを訪ね、５月に蔵出しされるアルコール度７％以上という濃い目の「マイボックビール」について紹介。旧西ドイツの各地には、1200のビール醸造所があるがそのうち800の醸造所がバイエルン州にある。バイエルンはまた低温で発酵し長期熟成させた「ラガー・ビール」の発祥地としても有名である。ドイツのビール作りは11世紀にさかのぼる。最初は修道院で作られていた。ドイツのビールは「大麦・ホップ・水のみによって造られるべし」という『ビール純粋令』によって造られている。この法令ができたときにはまだ酵母の存在は知られていなかった。

97. **「ベルリンの壁は消えたか～ドイツ統一３周年～」**〔1993年10月３日・BS１・４時間30分〕統一から３周年の10月３日、この日は

ドイツでは新たに祭日となった。NHKは、旧東ベルリンの共和国宮殿前の広場に至る「宮殿橋（Scloßbrücke）」のたもとに特設スタジオを設け、メインキャスターを高島肇久として、さまざまなゲストを招きながらドイツの現状を伝える。番組冒頭では、この広場の一角に仮設されたかつてのベルリン王宮をかたどった「ビニール宮殿」について報告される。第2次大戦でひどく破壊された王宮は、旧東独がこの地に共和国宮殿を作る際に爆破撤去したものであるが依然としてベルリン市民にとっては、心のよすがであり続けている。復元ははたして可能かどうか－結論はまだ出ていない。またアレンスバッハ世論調査のデータが紹介されているが、それによれば旧東西の両地域において統一の頃よりも社会的不安を抱いている国民が増加していることが明らかに示されている。

98－101．「世界史の中のドイツ戦後」〔1993年10月4～7日・ETV・各45分〕ドイツ文学者・三島憲一氏は、東西両ドイツの著名な文学者をたずねて、彼らとドイツ戦後史とのかかわりについて詳しくインタビューをしていく。「文学活動の歴史、政治へのアンガージュマン」という視点から興味深い内容を構成している。

1．引き裂かれた国家〔10月4日〕「ニュルンベルク国際軍事裁判（1945－46）」では、100万人にのぼる戦犯容疑者の追求が行われた。人道に対する罪として、ユダヤ人虐殺、知的障害者への安楽死殺人が問われたこの時期をドイツでは「零年」という。もちろんここでは日本において元号が変わるように、すべてがカウント・ゼロという「断絶」が起きたわけでなく「連続」性というもう一つの視点が存在する。このことを踏まえて、1946年当時、ナチス党員を公言するドイツ人はいなかったし、ドイツ人への忘却への願望も「ドイツ零年」という言葉に含まれるのであるが、1946年の映画『殺人者は我々の間にいる』（„Die Mörder sind unter uns“）では、市民とナチスとの関係を、戦後改めて問いなおす

契機となった。番組で三島氏は、ヘルマン・ブラウザー、ギュンター・グラス、ハイナーミュラー、シュテファン・ハイム、シュテファン・ヘルムリン、ハンス・マイヤーなどの東西の文学者とのインタビューの中で、分断国家で生きていかざるを得なかった実存性の深部をあらためて問いなおす作業に、かなり成功しているといってよいだろう。

2．**壁・二つの実験国家**〔10月5日〕1993年7月25日、バイロイトにおけるワーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」の上演には元ソ連の指導者ゴルバチョフも招待された。だが、この時彼にはベルリンの裁判所からの召喚状も届けられた。「壁際の殺人に、ソビエトの大統領としてどのように関与したか」という証人としての出廷を求めたものである。壁の崩壊後、冷戦下で抑えこまれ蓄積されていた民族紛争・外国人排斥・失業問題などが一挙に噴出するなか、壁が構築された時期の東西の文学者の政治的現状へのスタンスの取り方があらためて問われることとなる。この時期ギュンター・グラスは東への文学者への公開質問状の中で「作家なら発言すべきであり、沈黙は罪である」と訴えかけるが、これに対して東の知識人は沈黙を守る。むしろほとんどは壁の建設に賛成するという楽観的態度であった。クリスタ・ヴォルフの『引き裂かれた空（1964）』は、この時期の東独の市民の生活と願望を描いた作品である。◆この2回目の番組で注目すべき点は、壁の構築後から60・70年代の西ドイツの社会状況を比較的丁寧に説明していることである。この時期の日本は高度経済成長で走り続ける時期で、学生の体制への異議申し立て、過激派テロなど類似した現象が見られる。1989年の壁崩壊に至る前史として、比較的焦点の定まらない時期であるが、この番組によって、戦後から40年間の一貫した歴史的パースペクティヴが形成されよう。

3．**過ぎ去らざる過去**〔10月6日〕ドイツ人の過去を見つめる視点

は二重構造である。一つは、ナチズムという暗い過去を正視するという緊張を要するまなざしと、もう一つは、過去の栄光という明るい面をまなざす視点である。1991年7月プロイセン王国の基礎を築いたフリードリヒ大王の柩が、本人の遺言により数百年ぶりにポツダムのサンスーシ宮殿に埋葬し直された。東西ドイツが、それぞれの独自の理由で歴史を眼差す視点が奇しくも一致した興味深いできごとであると言えよう。1983年には「ルター500年祭」1985年には「バッハ生誕300年祭」など、主として東独において政権基盤の強化と正当性の確認を国民へ求めるプロパガンダが連続した。1986年にサンスーシ宮殿で開催された「大プロイセン展」は、歴史の中のドイツ精神の再評価という自信回復の側面と、東独の単独政党の歴史継承正当性のアピールという側面の二面性を持つものであったろう。あるいは、過去の栄光の歴史を引き合いに出さねばならないほど、東独のシステムは制度疲労しており、崩壊への予感が準備されたと見るのはやはり後知恵であろうか。1987年には、東西両ベルリンで建都750年祭がそれぞれに壁を隔てて競い合った。これは東西のベルリンのつながりを強める絶好の機会でありえたのであるが、共通の記念行事が行われることはなく、西ベルリンのディープゲン市長と東独のホーネッカー国家評議会議長が相互に訪問する話もつぶれてしまった。壁の崩壊までは、あと2年待たねばならなかった。

4．統一後を生きる〔10月7日〕分断国家の統一は、そこに生きる国民にとっては確かに喜ばしいことに違いないが、パンドラの箱をあけたように、それまで隠されていた問題が一気に噴出することにもなる。東西両市民の心の壁が取り沙汰されるときに、それを一言で言えば、お互いが「被害者意識」を抱いているということになるだろう。番組のインタビューが行われたこの時期にすでに、統一は余りにも急ぎすぎたという意見が多く出されている。

西ドイツのコール首相が政治的な功名心から統一という名の「東独の吸収合併」を急いだとすれば、後年彼は評価の対象とならず、批判の対象となるかも知れない。しかし東独の社会システムの破綻のツケがどれほど莫大であるかを予測しえた人はいなかったとすれば、コール氏のみが批判の矢面に断たされるのは不当であろう。

102―104.「EC・統合の夢(1)民族国家の壁(2)日米経済への挑戦(3)近未来想定ドラマ・2013年欧米開戦前夜」〔1993年10月22・29日／11月5日・ETV・制作：BBC／イギリス・各45分〕

(1)**民族国家の壁**　1991年「欧州連合条約（マーストリヒト条約）」により、欧州統合が本格化することになったが、国家のアイデンティティないしナショナリズムに固執する人々には大きな課題を突きつけている。二つの大戦を経験し、二度と戦争を起こさないという「不戦の構想」と経済的競争で、日・米に対抗する力をつけるという共通市場の拡大を目指したEUに対して、懐疑的なイギリスの視点が図らずも表明されている。番組はさらに共通市場域内の経済格差（例えばイタリアの南北格差）あるいは豊かな欧州を目指してアフリカから流入してくる不法難民の問題が、欧州各国おいて共産主義という敵の消滅した極右勢力のエネルギーの捌け口となっていることを指摘する。◆極右の台頭というドイツ国内の問題は、同時に欧州統合というヨーロッパ全体の動きのアンチテーゼとして、地方分権を主張する地域主義、難民問題に伴う外国人排斥主義へとエネルギーの方向転換をしている。このことは、ドイツ国内に於けるネオ・ナチの動きが統一後の経済格差・失業問題というドイツの国内的問題であるばかりでなく、ヨーロッパ全体において統合と全く反対方向のベクトルを示す白人至上主義的な伝統回帰運動の中で見直してみる必要があるだろう。

(2)**日米経済への挑戦**　1990年1月1日、ECは市場統合を完成し、

ヨーロッパ自由貿易連合諸国を含めた19ヵ国の間で共同市場が本格的に動きはじめた。ヨーロッパの中で国境をなくしてヒト・モノ・サービス・資金の移動を自由にしようというものである。共同市場は21世紀への生き残りをかけたヨーロッパの切り札である。しかしここに東ヨーロッパという大きな問題がある。熾烈な経済競争の中でヨーロッパははたして生き残れるかというのが2回目のテーマである。欧州はかつての産業革命発祥の地であり2世紀にわたり工業生産で世界の頂点に立っていたが、現在、アメリカや日本という経済大国に追いつこうと懸命にもがいている。とはいえ、日本の繁栄がいつまで続くかも不明である。将来の生き残りのための発想の転換のひとつがEUという実験でもある。1951年4月に『欧州石炭鉄鋼共同体』が成立、欧州共同市場の出発点ともなる。戦後繁栄をきわめたアメリカ経済をにらみながら、欧州の国別の市場の閉鎖性を取り除かない限り生き残りはあり得ないという発想から生まれたものである。自由主義経済にとって市場は大きければ大きいほどよいという原理論が基本にあり、この原理は、かつてのヨーロッパ列強による帝国主義的経済拡張原理あるいは経済ブロック形成原理の焼直しでもある。番組では、欧州への日本企業進出のもたらす問題も取り上げる。◆番組では、BBCがEC統合という視点から見つめた、日本の戦後経済の復興の過程の描写が興味深い。日本に対する経済的脅威が単一市場形成原理の実行にはずみとなったことは、欧州統合の歴史過程と日本との一つの結節点となろう。

(3)**近未来想定ドラマ・2013年欧米開戦前夜**　20年後、世界は3つの経済ブロック（ヨーロッパ・アジア・アメリカ）に色分けされる。これと同時に民族主義も台頭し、ついにヨーロッパとアメリカとの間で軍事衝突が起きるという、可能性のある一つの結論が出される。SFにも似た想定ドラマであるが、SFはしばしば未来を

正確に予言した実績を持っていることも忘れてはならないだろう。経済予測の専門家の多くは、21世紀の経済競争における「勝ち馬」は間違いなく欧州ではなくアジアであると語る。それがどこの国となるかは特定できるだろうか。アジアが勝つ条件は、欧州が過去に犯した過ちを再びアジアが繰り返さない限りにおいてである。もちろんアジアにもかつて欧州と同様の過ちを犯した国もあることは記憶に新しい。

105. **「ベルリン・生と死の堆積〔小田実〕」**〔1993年11月21日・BS 2『世界わが心の旅』〕８年前、小田実はベルリンで足かけ２年暮らした。ベルリンは街のいたる所に歴史の記憶が詰まっている。小田氏はベルリンの歴史に係わる多くの場所を訪れる。「アンハルター駅」の廃墟－1941年に日本の松岡外相がこの駅に降り立つ。日独軍事同盟に調印のためである。ヨーロッパ最大の駅とも呼ばれたここは現在見る影もない廃墟として壁の一部が残されている。ゲシュタポ本部跡地（ニーダーキルヒナーシュトラーセ）。グリーニッケ橋～冷戦当時の東西の捕虜やスパイの交換の場所。ヴァンゼー・ヴィラ（旧ナチス将校クラブ）～1942年にここでユダヤ人の絶滅計画、いわゆる「最終解決」が決定された。番組ではドイツからポーランドにある絶滅収容所への鉄道による具体的な輸送計画について説明される。小田氏の夫人は在日朝鮮人で、当時の彼女のパスポートには『北朝鮮以外のすべての国と地域に通用する』と英語で書かれている。順恵（スネ）夫人は日本に帰るときには、再入国許可書を必要とした。小田氏は、さらにプレンツェンゼー処刑場と訪れる。ここはナチスに抵抗したドイツ市民の処刑場で、思想言論弾圧の犠牲となった市民の遺族には「死刑執行料請求書」が送りつけられてきた。小田さんはここで独裁政治に抵抗して死んだ人のことを思い、涙声ながらこう語る。「私はここへくると生きていく勇気がでる」。

106. **「ヒトラー暗殺計画～ナチスと戦ったドイツ人～」**〔1993年11月

28日・BS2・75分、制作：コハブ・シアター・ファンデーション／1991年米〕1944年に行われたナチスの特別法廷では170人ものドイツ国民が絞首刑を含む有罪判決を受けた。容疑はヒトラー総統の暗殺計画〔同年7月20日に決行〕に加担したというものである。この未遂に終わった暗殺計画には、軍部の中枢に入り込んでいた軍人も加担していた。彼らはAbwehr（アップヴェーア）という秘密組織を作り、用意周到に暗殺計画を練りそして実行に移したものの、辛くもヒトラーは死を免れ、すさまじい報復に出たのである。ヒトラーに反対した人々のその理由は①独裁政治と反対派への弾圧②宗教的な信条③ユダヤ人迫害への疑問などにもとづくものであった。命がけでヒトラー排除に挑んだ次のような人々の生きざまを番組では取り上げる。ユリウス・レーバー〔社民党議員〕、ヘルムート・フォン・モルトケ〔名門の弁護士〕、アダム・フォン・トロット〔外務省官僚〕、カール・ゲルデラー〔ライプチヒ市長〕、ヘニング・フォン・トレスコー〔プロイセン軍人〕、ディートリヒ・ボンヘファー〔神学者〕。トレスコーは同年7月20日自殺する直前にこう書き残している。「我々の行動は正しかったと私は今も固く信じている。人々が己の信念のために命をなげうつ時に、人類にふさわしいモラルが生まれるのだ」

107.「ヨーロッパ・ピクニック計画～こうしてベルリンの壁は崩壊した～」〔1993年12月19日・NHK・90分〕東西冷戦体制の終焉の引き金になった「ベルリンの壁崩壊」から4年が過ぎた。その壁崩壊の要因の一つ、1989年8月19日にハンガリー・オーストリア国境で開かれた『平和集会』での東独市民の大量脱出が、実はわずか4人の男が仕組んだ「ヨーロッパ・ピクニック計画」と呼ばれる奇抜な計略だったことが、NHK取材班の取材で明らかになった。ハンガリー政府も初めて、この計画に関与したことを認めている。89年の平和集会とはオーストリアの欧州統一組織とハンガリーの民主団体

がオーストリア側のアイゼンシュタットとハンガリー側の間の国境地帯で開いた「汎（はん）ヨーロッパ・ピクニック」。これにハンガリーに来ていた東独市民が紛れ込み、約600人が西側に脱出。当時からハンガリー政府の関与がささやかれていた。NHK取材班はこの真相に迫るため、当時政治改革大臣だったポジュカイ氏、ネーメト首相、ニェルシュ経済改革大臣、ホルン外相らにインタビューした。その結果、89年の早春、首都ブダペストの労働者党(共産党)本部にポジュカイ、ネーメト、ニェルシュ、グロースーの4人の最高幹部が極秘に集まり、社会主義と決別し、複数政党制で自由選挙が避けられないという認識で一致。その実現へ向けた一つが「東独市民を白昼堂々、大量に西側に脱出させ『鉄のカーテン』を有名無実のものとする。それにはトリックが必要」というものだった。たまたま、8月19日に平和集会の計画があることが判明、これに東独市民を紛れ込ませて国境を開ければ『鉄のカーテン』は無意味になる。当日は国境警備兵の数を少なくし、しかも彼らに発砲を禁じる通達がひそかに出されたという」(ポジュカイ氏)。こうして公称600人、実質1000人以上といわれる東独市民が西側に脱出。ハンガリーで国境が開いたという情報を知った東独市民がその後次々とハンガリーに押し寄せ、壁の崩れる11月までに20万人の東独市民が西側に脱出、ベルリンの壁の崩壊へとつながっていった。取材班は7月から旧東欧各国、ドイツ、ロシア、米国などを取材。当時の各国指導者や情報活動に直接かかわったスパイなど約100人から取材した。壁を崩したのは政治家ではなく名もない市民だったという事実は痛快であると同時に重いものがある。〔『産経新聞』1993年11月24日の記事を参考にした〕

1994年（平成6年）

108.「アイヒマン～『知ってるつもり』～」〔1994年12月4日・TeNY・54分〕1962年5月31日、南米で逮捕されたナチス戦犯アドルフ・アイヒマンの絞首刑が執行された。アドルフ・ヒトラーと同じ56歳であった。1963年アメリカ・エール大学心理学研究室のスタンレー・ミルグラム教授は有名な実験を行った。いわゆる「アイヒマン実験」がそれである。これは、いかに普通の人間が権威に弱く服従するかを調べる実験である。『服従の心理学』の著者ミルグラム氏は語る。「この実験の結果は不吉だ。人間の中にある正義感は権威をもつ人間の前では崩れてしまうことを裏付けたからだ。政府レベルの権力がどれだけ多くの人々に服従させる力を持っているかと思うと、大変恐ろしいものを感じる」。重要なのは、ナチス的残虐行為は、特定の人間によって行われたのではなく、普通の人間によって行われたということであり、これは現代社会においても、各地の地域紛争の中に見られる残虐行為すなわち、民族浄化という名のジェノサイドや、アフリカのルワンダにおける「ラジオ煽動放送」による民族抗争と虐殺において、さらには日本においてカルト教団による毒ガスを用いた「無差別殺人」などにも共通するある種の原理性を示す実験である。番組では、ミルグラム氏の次の言葉が引用される。「ナチスのユダヤ人虐殺は、数千の人達が服従の名において遂行した忌むべき背徳行為の最も極端な例である。しかし、それほどひどくなくても、この種の行為は絶えず繰り返されている。普通の市民が他の人間を殺すように命令されて従うのは、命令されていることが義務であると思っているからである。従って、権威への服従は長い間美徳として称賛されてきたが、邪悪な目的の為に使われるとするならば、見直されなければならない。それは美徳どころか憎むべき罪となる。でないとすれば何であろうか」。

109.「戦場の子どもたちを救え～ドイツ国際平和村からの報告～」〔1994年1月8日・NHK・50分〕オランダとの国境に近いオーバ

ーハウゼン市にはドイツの市民団体「国際平和村」がある。ここは世界の紛争地域において、地雷や戦闘で傷ついた子どもをドイツの医療機関で治療を受けさせ、再び母国に帰還させるボランティア活動が行われている。ここに連れて来られた子どもたちはほんの一握りにすぎないが、彼らの日常はいつも戦場の中にあった。国際平和村ではドイツ全土に200以上の協力病院のネットワークを持ち、そこではベッドに空きがあるときは無償で子どもを入院させることができる。実際の手術を行う医師と看護婦はボランティアである。さらに入院中の子どもの世話をするボランティアもそれぞれの病院に数名登録されている。ボランティアの一人は語る。「子ども一人救っても焼け石に水ではないか。でも子どもたちが母国に帰る時に見せる笑顔をみるともっと続けていこうと思う」さらに、良心的な兵役拒否によるボランティア活動をする若者（Zivis）の力によるところも大きい。Zivis：Zivildienst は兵役通知を受け取った青年男子が良心的な兵役義務を拒否したいときは自ら申告し、審査の後に兵役に変わる様々な社会奉仕をする制度。兵役と同じ金額３の手当てが支給される。

110. **「メディアと権力①大衆操作の天才・ゲッベルス」**〔1994年３月30日（再）ETV・45分、制作：BBC／イギリス・1992年〕とりわけ20世紀、政治におけるプロパガンダ（宣伝）は、新聞やテレビなどの巨大メディアを巧みに操作、権力者に利益をもたらしてきた。影の支配者はどのようにマスメディアを操ってきたのかを考える３回シリーズの番組。１回目はナチスの宣伝大臣として、ドイツの世論を思うがままに操作したヨーゼフ・ゲッベルス（Joseph Goebbels　1897－1945）。近年発見された彼の日記から、初めて近代的なプロパガンダを構築した人物ゲッベルスの情報操作の秘密に迫る。ゲッベルスの才能を見抜いたヒトラーは若干35歳の彼を啓蒙宣伝大臣に据える。ゲッベルスが力を入れたのが「映画」であるが、

彼はあからさまな政治的プロパガンダそのものをひどく嫌った。娯楽本位の映画づくりが最良のプロパガンダであると考えていた。つまり大衆が求めているものを提供し、その裏に政治的な仕掛けを忍びこませるという手法。娯楽映画で大衆は、個人的心配を忘れ、国家的行動へと駆り立てるという仕掛けである。番組では、インタビューを含め多くの興味深い人物が登場する。「リリー・マルレーン」の作曲者ノルベルト・シュルツェ、ゲッベルスに酷く嫌われた女性映画監督レニ・リーフェンシュタール、反ユダヤ映画を作った映画監督フリッツ・ヒップラーなど。

111―114.「検証・ヒトラーとその時代～(1)ヒトラー暗殺計画(2)映像発見・総統の祝典(3)真相追跡ヒトラーの最期(4)50年後の対話～ナチスとユダヤの子供たち」〔1994年3～5月・ETV・各45分〕

(1)**「ヒトラー暗殺計画」**（4月8日）映像資料106で紹介した番組を、NHKが45分に再編集した番組。

(2)**映像発掘・総統の祝典**〔4月15日、製作：バーウィック・ユニバーサル／ZDF・英独〕権力基盤を確実なものとしたナチスは、1939年7月ミュンヒェンにおいて、アーリア民族の優秀性を高揚するための『大ドイツ芸術祭』を開催した。ポーランドに侵攻する2か月前のことである。当時ミュンヒェンに住んでいたベルント・ファイアーアーベントさんは趣味で映画作りをしており、彼がこの芸術祭の模様を撮影したカラー・フィルムは長い間倉庫で眠っていたが、50年にしてようやく日の目を見た。フィルムを見た老婦人は、当時のパレードに参加した一人で次のように語る。「青春時代の輝かしく懐かしい思い出です。大衆はいつでもお祭りが大好きなのです」。他方ミュンヒェン・イスラエル文化協会の会長シャルロッテ・クノープロッホ女史は「悪夢が、昨日のことのようによみがえる」ととまどいを隠せない。◆この大ドイツ芸術祭は、あからさまなナチスのプロパガンダ戦術の一貫である。

ナチスはドイツ芸術をたたえ、ドイツ国民の過去の歴史の偉大さを讃えることで自分たちの存在を正当化し、さらには国民を団結させようとした。そしてその目的は成功した。忘れてならないのは、同じ時期にミュンヒェンで開催された『頽廃芸術展』である。これはユダヤ人の芸術家を組織的に攻撃する試みで、健康な肉体美を礼賛するナチスにとって、表現主義やデフォルメ芸術は、恰好の攻撃対象となった。なお、この『頽廃芸術展』の歴史的回顧展は1994年、日本でも開催された。

(3)**真相追跡ヒトラーの最期**（4月22日）1945年5月、連合軍の中でいち早くベルリンに突入したソ連軍は、総統本部の地下壕（der Bunker）でヒトラーの焼死体を発見。ソ連KGBはその後、軍隊の移動とともに遺体を運び出しドイツ各地で埋葬・掘り起こしを繰り返したため、その後正確な埋葬地が特定できなくなってしまった。番組では、当時の二人のKGB職員の記憶をもとに最終埋葬地を特定する作業を行う。最終的に特定された場所は、ザクセン・アンハルト州の州都マグデブルクであった。

(4)**50年後の対話～ナチスとユダヤの子どもたち～**（5月11日）以下では、新聞に掲載された番組批評を掲載する。「今までホロコースト（大虐殺）を扱ったものは、どれもがアウシュビッツ収容所での悲惨な体験やナチスの残虐行為で、どちらかと言えばユダヤ人の側から描いたものだった。しかし今回、私が見た番組（NHK教育「海外ドキュメンタリー検証・ヒトラーとその時代、50年後の対話～ナチスとユダヤの子供たち＝英国BBC制作」は当時、実際にユダヤ人虐殺に手を下したナチス戦犯の子供たちと、アウシュビッツから奇蹟的に生き長らえたユダヤ人生存者の子供たちとの対話であった。これはある心理学者によって実現したものだったが、これまでタブーだったかもしれない。番組での対話セッションは実に穏やかに進んだ。そして加害者側のドイツ人がどの

ように悩み苦しんできたかをユダヤ人も知る。父親の時代のイデオロギーに振る舞わされ、罪悪感を引きずった人生を送ってきた彼らもやはり戦争の被害者だったのだ。もし私がこうした状況でドイツ人の立場だとしたら、自分の父が殺したユダヤ人の子供に対面する勇気はあっただろうか。また反対にユダヤ人の立場だとしたら、空想の中で幾度も復讐しただろう。最近、雑誌でネオナチ運動の元指導者のインタビューを読んだが、過去を省みず、世界があの悪夢に再びおののくことを望んでいるその発想に背筋の凍る思いがした。そして日本でも南京大虐殺をでっち上げと言った政治家もいた。この番組で一人のドイツ人女性が、自分が死んで父の侵した罪を償いたいと流した涙を、このような人はどう受け取るのだろうか。心底怒りがこみ上げるとともに、こうした考えをいつまでも野放しにしてはいけないと思う。「両者はコインの表と裏でしかないのだ」という番組での発言は、戦後50年を考える意味で、戦争を知らない私に意義深い言葉だったことは言うまでもない。朝本千可能〔サックス奏者〕（引用出典：『新潟日報』1994年5月25日）

115―116. 「クリスタ・ヴォルフ～インタビュー(1)引き裂かれた空(2)統一後を生きる」〔1994年4月20／27日・ETV・各45分〕　東西ドイツ統一から3年半が過ぎた。当時コール首相は「光輝くテューリンゲン、活気にわくザクセン」と統一の夢を国民に語ったが、失業者は400万人を越え、旧東独は資本主義の競争原理に飲み込まれそうになっている。こうした中、旧東独の作家たちは、かつての時代の「抵抗か順応か」についての厳しい選択、そして西側からの厳しい糾弾という二重の批判にさらされている。その矢面に立っているのがクリスタ・ヴォルフ（Christa Wolf, 1929―）である。ナチス時代に少女期をすごした彼女は、旧東独時代には、作品が「国家栄誉賞」に輝く反面、STASI（シュタージ：国家保安警察）の厳し

い監視下にも置かれた。ドイツ文学者三島憲一氏は、かつての高級官僚・知識人が多く住んでいた旧東ベルリンのパンコー地区にヴォルフを訪ね、インタビュー取材を行う。番組の中でヴォルフは、①統一ドイツの現状をどう見ているか②若い人々の気持ちについて、③これからの政治の動向、④東の知識人の置かれている立場、などについて語る。1989年11月５日、壁崩壊の直前の東ベルリンで民主化を求める50万人の大規模な市民集会が行われた。壇上にはヴォルフの姿もあった。彼女は市民に訴えかける。「現在の状況を『転換』（die Wende）と呼んで良いのでしょうか。この言葉には風まかせに船の向きを変える船長と、言いなりになる乗組員たちの姿が重なって見えます。私たちが恐れているのは、利用されることです。対立によって『分裂』状態を悪化させてはなりません。この数週間は私たちにとってただ一度のチャンスです。明敏な理性を持って夢を見ようではありませんか」◆インタビューの中で、彼女が代表作「引き裂かれた空」を引用して語る50、60年代の東独の時代の雰囲気は、当事者ならではの現実性を伴って伝わってくる。

117. **「ポーランド・愛と死のアウシュヴィッツ」**〔1994年５月１日『世界わが心の旅・草柳大蔵』・BS２・45分〕1941年７月29日、アウシュビッツ収容所第14ブロックから一人の脱走者が出た。それに対する報復として収容所所長は無作為に囚人を10名選び出し、食事も水も与えない「餓死刑」を課した。ある囚人が『妻や子に会いたい』と叫んだ時、一人の囚人が歩み出て身代わりを申し出た。マキシミリアン・コルベ（1894－1941）－カトリックの神父だった。所長は身代わりを認めてコルベと９人の囚人は処刑室に向かって歩み始めた。どうして、人は他人の為に命を犠牲にできるのか－評論家草柳大蔵は、長い間問い続けてきた。なぜ神父は他人のために自らの命を投げ出したのか－コルベ神父の心の旅路を自らの人生の旅路に重ねて探ろうとした。ナチス時代多くの収容所が存在したポーランド

は、国民の90％以上がカトリックの信仰を持つ。コルベは若くして神父の道をめざし、結核を患いながらも信仰活動に励む。1931年4月にコルベの姿が突然長崎港に現れる。30才の時である。以来彼は長崎の地でマリア信仰の布教拡大のため神学校を建てて、神学生を養成した。コルベが情熱を注いだ長崎の地は1945年8月9日、アメリカの2発目の原爆の標的となる。1936年コルベはポーランドに帰国、神父と修道士との階級格差是正にも取組んだ。1939年9月1日にドイツ軍はポーランドに侵攻、ナチスは大衆に大きな影響を持つ人物を次々と逮捕し、コルベはビルケナウからアウシュビッツに送られる。コルベ神父の身代わりで助かった元ポーランド兵士は、93歳で今も健在である。彼は言う。「私は生きているかぎり、コルベ神父のことを語り続けるだろう」。◆番組の最後に草柳氏は笑顔で語る「重苦しい話を聞いてきたはずなのに、なぜか気持ちはとても明るく晴れやかである」。氏はあえて語らないが、それは人間性への信頼という希望表明であろう。

118. 「海外派生～ドイツの選択～」〔1994年5月2日・NHK・50分〕

第2次大戦で敗戦国となり、戦後奇蹟的な復興を遂げたドイツはしばしば日本と比べられる。ドイツ憲法は1949年、東西分裂のため「基本法」として定められた。その24条2項には「集団安全保障」をうたい、暴走への歯止めをかけた。1954年にはパリ条約に調印しNATO（北大西洋条約機構）に加盟、再軍備が認められた。「基本法」はこれまで36回改正されているが、今問題となっているのは、与党キリスト教民主・社会同盟（CDU·CSU）が提出した①国連平和維持活動（PKO）への参加②戦闘行動を含む平和維持活動への参加③同盟国と共同の集団的自衛権の行使－。これが連邦議会で成立すればドイツ連邦軍が多国籍軍に参加する道を開く。このため野党（SPD）は「NATO域外はPKO活動に限定すること」と反対、連立与党の自由民主党（FDP）も「世界に派兵することは認めら

れない」と憲法裁判所に提訴している。日本もドイツも1991年１月の湾岸戦争のとき、「血を流さない」と世界から袋だたきにあり、国際貢献への模索が始まっているが、番組では国論を二分しているドイツ国民の声、改憲案提出後急増した兵役拒否者の声、連邦議会での論戦、制服組の声などをはさみ、つい最近、長年ドイツ外交のかじ取りをし、政権内部から「NATO 域外へ派兵するなら明確な憲法に基づいて参加すべきだ」と主張するゲンシャー前外相のインタビューでつづる。白熱する論議の中、連邦軍は４月12日、改憲に結論が出ないまま、初めて域外のユーゴに飛び立って見切り発車した。〔番組紹介は『産経新聞』1994年５月１日の記事を参考にした〕

119. **「日常の中の戦場を描く～女性監督ブラームスと語る～」**〔1994年５月９日・ETV・45分〕　ヘルマ・ザンダース・ブラームス（Helma Sanders Brahms）監督の代表作は「ドイツ・青ざめた母」（1980）であるが、彼女はこの映画で、戦争の傷痕が長い時間をへてもなお夫婦や家族の絆をひきさいていく実態を自伝的に描いている。映画の中の次の台詞は印象的である「家庭の中で新たな戦争が始まった」。ブラームス監督と対談するのは、映画監督小栗浩平氏。ブラームスは、小栗の作品「伽椰子のために」（1986）を引用し、両者の作品の共通性、すなわち「急激な社会の変化と人間の心の葛藤」について語る。1989年のベルリンの壁の崩壊はやがてブラームスに同じテーマの継続を促す作品を準備させる。それは、旧東独社会の崩壊という激しい歴史的変化を描いた「林檎の木」である。

120. **「林檎の木」**（„Apfelbäume“　1992年・ドイツ）監督／脚本：ヘルマ・サンダース・ブラームス。ドイツ分断の直後に生まれ、旧東独の林檎園で働く女性の半生を綴ったドラマ。主人公レーナはベルリンの壁が築かれた（1961年８月）一年後、ポツダムで生まれた。成人になった彼女は、社会主義国家の理想が崩れていくの感じながら林檎園に就職する。そこで働くハインツと結婚するが、上層階級

出身の労働組合長ジエンケの強引な求愛を受け入れてしまい、三角関係に陥る。さまざまな葛藤を経てやがてハインツとレーナは絆回復への手がかりをもう一度真剣に模索し始める。（111分）

121. **「建築家ブルーノ・タウト～ユートピアを求めて～」**〔1994年7月3日『日曜美術館』・ETV・45分〕統一から4年が経過し、東西の経済格差や、ネオナチの台頭といった社会問題が噴出する中、東西両ドイツの文化遺産として、主に旧東独に存在する近代建築遺産の修復が進められている。その中には、80年前にドイツで活躍した建築家ブルーノ・タウト（1880－1938）が設計したベルリン周辺の「集合住宅（die Siedlung)」も数多く含まれている。ベルリン・ノイケルンの角地ビルのファサードのデザイン、ベルリン・ブリッツ地区の「馬蹄型ジードルンク」、ファルケンベルグの強いコントラストを持った壁の色彩で有名なテラスハウスなどが紹介される。タウトの建築家としてのデビューは、1914年のケルン工芸博覧会における「グラース・ハウス」であるが、それ以後一貫して彼は建築に、自然と調和した理想郷（ユートピア）を求めつづけかつ実践してきた。タウトは日本では、その著書『日本美の再発見』（岩波新書）の中で「桂離宮」の美を評価した人物として知られている。タウトは、バウハウス運動の創始者の一人であるが、ナチスが政権を獲得した後、ユダヤ人への迫害が熾烈さを増す中、夫人を伴って国外亡命の途中日本に立ち寄る。アメリカ移住を希望していたが、なかなか認められず2年間日本で滞在するが、良い仕事には恵まれず、やがてトルコへと移り住み、1938年その地で没した。ナチスのポーランド侵攻の一年前のことである。

122. **「証言・シンドラーの素顔～ユダヤ人を救ったドイツ人～」**〔1994年5月14日・NHK・50分、製作：テムズテレビ／イギリス・1993年〕　美食家で賭け事が大好きなその男は、ドイツ軍諜報部のスパイであった。彼はチェコスロバキアやポーランドでセールスマン

として働きながらドイツに情報を送っていた。ナチス・ドイツがポーランドに侵攻すると、そこで事業を起こして成功し大金持ちになった。ナチスに物資を供給する軍需工場を作ったのである。しかし、これほどドイツに忠実だった男が、後に強制収容所から1000人以上のユダヤ人を救い出すことになる。オスカー・シンドラー―この謎と矛盾に満ちた男の生涯をたどるドキュメンタリー番組。1939年9月1日、ヒトラーはポーランド侵攻を指令した。侵攻の理由は、国境近くのドイツのラジオ放送局がポーランド兵に占拠されたというもの。これはドイツ諜報部が自ら仕組んだことで、この時に偽のポーランド兵の軍服を調達したのがシンドラーである。1974年10月9日、彼は66歳の生涯を閉じた。本人の遺言によりイエルサレムのカトリック教会で葬儀が行われ、大勢のユダヤ人も列席した。かつて、シンドラーがスイスに脱出するときに、残されたユダヤ人は金歯を溶かして指輪を作り、彼に贈った。その指輪にはユダヤの古い諺で『一人の生命を救う者は全世界を救う』と彫り込んであったという。

123. **「シンドラーのリスト」**（'Schindlers's List' 1993年・米）制作／監督：スティーブン・スピルバーグ。第2次大戦中の実話をもとに、S・スピルバーグが、商業的採算をあえて度外視して取り組んだ入魂の反戦ヒューマン・ドラマ。ナチス・ドイツの嵐が吹き荒れるポーランドのある町の実業家シンドラーは、迫害されるユダヤ人をこき使って財をなす。やがて強制収容所が建設され、ユダヤ人たちが虐殺され始めた。ナチスのやり方についていけぬシンドラーは私設収容所を設けて1200人ものユダヤ人を救おうとする。（B&W　195分）

124. **「民族(3)ドイツ・新連邦国家の模索」**〔1994年10月15日・BS1／制作：BBCイギリス／プリメディア・カナダ・50分〕ドイツが民族国家としてその形を成してからそれほど長い歴史を持たない。この民族国家としてのナショナリズムは、ナチスの時代には民族浄

化政策（ユダヤ人などの迫害）にすり替えられた。東西両ドイツの統一をきっかけとして、これまでドイツではあまり声高に語られることの無かった「国家とは何か、民族とは何か」を問いなおす動きが人々の間で高まっている。番組の案内役マイケル・イグナチェフは「ドイツの名誉を汚すことのないナショナリズムを作りだすことができるのだろうか」とまず問題提起する。イグナチェフは、壁崩壊の直接のきっかけになったとも言えるライプチヒにおける民主化の市民運動にかかわった人々をインタビューする。イグナチエフは、番組の中でナチス時代と旧東独の「類似点」を指摘したりするなど、かなり辛口のインタビューを続け、ネオナチスの若者とのインタビューや、外国人と旧ソ連から帰還するボルガ・ドイツ人の扱い方の違いに、ドイツ人の血統に対するこだわりをあぶり出したりする。これは日本のメディアには見られない切り口である。◆ライプチヒの月曜デモの当初、市民のスローガンは「我々は民衆だ（Wir sind das Volk)」であったが、やがて壁崩壊の直前にそのスローガンは「我々は一つの民族だ（Wir sind ein Volk)」と明らかな変質を遂げていく。Volk というありふれたドイツ語の名詞が、定冠詞がつくかあるいは不定冠詞がつくかによって、かなり隔たりのある意味合いを含んでいることは、我々外国人には見逃されやすい点であろう。この「民衆（das Volk)」と「民族（ein Volk)」の二義性、そして①民族国家としての歴史の浅さ②ナショナリズムと民族浄化の政策としての境界線、そして③外国人の取扱い方は、かなり微妙な相関性を持っており、同時にそれはドイツ社会を読み解く視点としても重要である。〔以下、続稿〕

参考文献

吉田和比古「ハイパーテクストとしての『言語と映像』」『新潟大学教養部研究紀要』p.65－77. 1993年。

吉田和比古「都市の記号論～ベルリン・二項対立の首都再生～」『新潟大学言語文化研究』第２号 p. １－14. 1996年。

吉田和比古／高津斌彰共著：「オムニバス形式での総合講座『現代都市論』の教育効果をあげる工夫」『大学教育研究年報』新潟大学教育開発センター第３号133－144. 1997年。

吉田和比古「メディア、あるいはファシズム(1)レニ・リーフェンシュタール論」『法政理論』新潟大学法学会、第30巻第２号 p. １－29. 1997年。

吉田和比古「物語の構造(1)～『昔話』から『現代メディア』へ～」『新潟大学言語文化研究』第３号　p. １－15. 1997年。

吉田和比古「メディア、あるいはファシズム(2)～ドキュメンタリー〔記録〕とドラマ〔物語〕の境界～」『法政理論』新潟大学法学会、第32巻第１号 p.37－74. 1999年

吉田和比古「物語の構造(2)～『昔話』から『現代メディア』へ～」『新潟大学言語文化研究』第５号　p.131－150. 1999年。

吉田和比古「メディア、あるいはファシズム(3)～ドキュメンタリスト・亀井文夫と戦意高揚映画～」『法政理論』新潟大学法学会、第33巻第１号 １－34. 2000年。

吉田和比古「フォト・ジャーナリズムの戦争報道の歴史とデジタル・メディア時代における新たな課題」『法政理論』新潟大学法学会、第33巻第２号 p. １－34. 2000年。

吉田和比古「物語の構造(3)～映像言語教育としての『メディア・リテラシー』～」『新潟大学言語文化研究』第６号　p.85－100. 2000年。

吉田和比古／高津斌彰共著：「総合科目『現代都市論』のためのビデオ・アーカイブ～教育研究レファレンスとしての映像メディア」新潟大学教育開発センター第６号〔印刷中〕